
Beyond Beable

コヨミミライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beyond Beable

【Nコード】

N6531Z

【作者名】

コヨミミライ

【あらすじ】

ヒルベルト王国ユークリッド州の州都であるインノルム市。その街で探偵業を営むユカワケイスケは、夢も目標も生き甲斐も自分自身も見失った、典型的な人生に疲れた男であった。毎日やり甲斐のない依頼をこなし、ただ惰性のままに張り合いのない人生を消化していくだけの男だった。しかし、ある日、偶然にも一人の少女と出会ったことでユカワの世界は一変する。少女の名はイリス・ユデイト。終わりなき宿命に翻弄され、自分の生き方を見失った者。ほんの些細な運命の悪戯によって出会った二人。一回りほども世代

の違うデコボココンビに、インノルム市の未来は託される、のかも
しれない。

狷介孤高のオブサーバー

イリス・ユディットに依頼の電話が入ったのは日が昇って間もない時間のことだった。依頼を一つ終え、疲れ切った身体を引き摺って夜更けに帰宅した直後ソファに倒れ込み、その疲労とは不釣り合いとは思えない浅い眠りを彷徨っていた時であった。浮き上がる程にも眠りに浸れていなかった意識をあつさり引き戻された彼女は、面倒そうに散らかったテーブルの上で充電されていた電話の端子に手を伸ばし、マナーのなっていない仲介人に応答した。

内容に面白味はない。

いつも通り、くだらない嫌味を始めに二言三言交わし、イリスは仲介人の私服のセンスを詰った。仲介人もまたイリスのシングルベッドが長年使われておらず、ただの物置と化していることを嘲る。

それは日常的で、取り立てて面白いことは全くない。

依頼内容もまた例外ではない。

きつと彼女の書斎にある文庫本を幾つか流し読みすれば、すぐに似たような話が見つかるだろう。もっと言えば、有料衛星放送のアニメーション専門チャンネルを二時間ほどピザを食べながら眺めていても同じような話が出てきそうなものである。運が良ければ注文したナポレターナが届くのを待っている間にお目にかかるかもしれない。

言ってしまうえば、それほどまでにありふれた仕事だったわけだ。

こんな依頼をワトソンから伝えられれば、シャーロック・ホームズだって肩を竦めて苦笑することだろう。コロンボ刑事だって妻を言い訳のダシに使って去っていくことだろう。

そんな依頼のために貴重な睡眠時間を削られたイリスもまた渋い顔であった。

大仰なため息を遠慮無く吐き出し、イリスは通話を終えた受話器をソファの隅に投げつけ、薄暗い部屋の中で出かける準備を開始した。

洗い物がたんまりと溜まったキッチンにあるコーヒーマーカーのスイッチを入れ、コーヒーが淹れ終わるのを待つ時間の内に昨日着たままだった服を脱ぎ、ソファの背凭れに引っかけられていた服へと着替えていく。脱いだ服は一人がけのソファの座面に丸めて投げ捨てた。

別に終わってから片付ければいいだけのことだ。

黒いタイツを履き、その上にホットパンツを履き、適当に掴んだ柄物のＴシャツを着る。この際何でもよかった。気に入らない柄だった場合はコートのボタンをかけて隠せばいいだけのことである。

ソファに倒れ込むように座り込み、編み上げのブーツへ小鹿のように細い脚を突っ込んで、乱暴にそれでいて手慣れた手つきで両方の紐をきつく結んでいく。

ソファから飛び上がるように軽快な動きで立ち、イリスはキッチンへと向かう。しんとした澄んだ空気の中、コーヒーマーカーが立ってる泡立った音だけが耳に心地よい。

抽出された琥珀色の液体は、ドリッパーの下に置かれたコーヒークップに注がれている。

香ばしい香りと湯気を立てるカップを手に取り、イリスはまだ熱いコーヒーに息を吹きかけながらリビングへと戻っていく。書類や衣服が散乱するテーブルの上からリモコンを拾い上げ、大型のデジタルハイビジョンテレビの電源をつける。

ぼんやりと液晶が淡い光を放ち、薄暗かった室内を不気味に照らし出した。僅かに遅れて、映像が液晶に広がる。

ちょうど朝のニュースの冒頭で、男女二人のニュースキャスターが今日の主立ったニュースを告げていた。高級そうなスーツを着こなし、ネクタイをきつく締めた男性キャスターの白い前歯を見せつけるような爽やかな笑い方が不快だった。

どれだけ息を吹きかけてもほとんど冷めた気のしないコーヒーを
嚙りながら、イリスはチャンネルを変えようとリモコンのボタンに
指を伸ばす、

「次のニュースです。カルデジアンビル自爆テロ事件より今日で十
五年となります」

女性キャスターの悲しみを演じるような薄ら寒い声音に指を止め
る。最近、週刊誌とある大物俳優とのスキャンダルが取り沙汰さ
れている女性キャスターの演技力には一切興味がない。その豊かな
胸に豊胸疑惑があることにしてもどうでもいい。

問題は画面右側でニュースを読み上げるキャスターではなく、左
上に表示された映像だ。

「千七百人以上の犠牲者を偲び、カルデジアンビル跡地での追悼式
には三千人にも及ぶ人々が詰めかけております。追悼式にはシグザ
バル前皇王、ユークリッド州知事であるアインザック氏、インノ
ルム市長アーベル氏も出席しており」

追悼式会場と表示された映像には、芝生に覆われた平地とそこに
建てられた巨大な慰霊碑、そしてその前に並ぶ喪服を纏った人々の
姿があった。

慰霊碑の前ではインノルム市市長が並べられたマイク達へ食らい
つくようにして、何事かを熱弁していた。焚かれたフラッシュにま
だ若い整った顔立ちを照らされながら、厳めしい顔で必死に訴えか
けているように見えた。

しかしその声は編集によって消されており、キャスターが要約さ
れた文章を読み上げるだけだ。画面が街頭でのインタビューに切り
替わったところで、イリスはテレビの電源を切った。

ソファへと放物線を描くようにリモコンを投げ、コーヒーを嚙り
ながらリビングを後にする。

くだらない感傷であった。

自身の中にあるあまりにもつまらない心の動きにため息を吐き出
し、キッチンへと移動した彼女はカップにまだ残っているコーヒー

をシンクへと捨てる。溜め込まれた食器類に降り注いだコーヒーが流れ落ちていく様をぼんやりと眺める。

そんな無意味な行為もすぐに飽き、イリスは前髪を掻き上げた。

「さっさと終わらせよう」

一人呟いたイリスは裾の長い白いトレンチコートを羽織り、ハンチング帽子を目深に被って自宅を後にした。

ウィグナーの友人のトラブル

「おい、ケイスケ。お前、今どこで何してんだ？」

仕事中、突然電話をかけてきた友人は藪から棒にそんなことを訊ねてきやがった。車の助手席に凭れかかり脚をダッシュボードへ投げ出した俺は携帯電話を耳に当て、ぼりぼりと頭をかいた。

バックミラーには心底億劫そうな俺の顔が映っていた。無精髭を生やした、何とも無気力な顔だ。見ているとなんか嫌な気分になるので、バックミラーの位置を上へとずらす。

「何って仕事に決まってる。平日の昼間にそれを聞くのはおかしいと思うんだが？」

「ケイスケ、お前はついに時間の感覚まで狂っちまったのか？ 今日が何日だか言ってみろ。できるだけ正確に言ってみろ」

「十一月二十五日」

面倒だが、あしらうのはさらに面倒なので適当に付き合うことにする。

なんかもう本当、毎年こんな問答をやってる気がする。

いい加減うんざりしてきた俺の手は自然と煙草に伸びていた。

「そつだ十一月二十五日だ。そこまで出てきてどうして分からないんだ？ もしかしてお前は最高にバカなのか？ 十年以上の付き合いだが、そんなこと知らなかったぞ？ そう気付かせない辺り、お前は天才なのか？」

「……うん、お前は天才的なバカだな。ポーランド人もびっくりだ」結構知ってた。大学時代から。

こいつが千人いたとして、電球を取り替える時には、電球を持つのが一人、家を持ち上げるのが五十人、あとは地球を回そうとするんだろうな。

間違いない。

煙草の煙を窓の外に吹き出し、ぼりぼりと頭を搔く。

「……追悼式来ないつもりか？」

「今行つてないんだから、行くわけがねえだろ。人は連続する点を通過してしか移動できないって知ってたか？」

「うるせえ。今日はサユさんの」

「おっと、もう切るぞ」

有無を言わず電話を切る。何か叫んでいたようだが、この際どうでもいい。

面倒くさい相手だ。毎年毎年よくもまあ続けるもんだな。あいつのこういうお人好しなところはどうにも苦手だ。

俺は煙草の灰を灰皿に落とし、フロントガラス越しに三階建てアパートを見上げる。

立ち並ぶアパートに個性はなく、全てが似たような形をしている。唯一の違いと行ったら壁面の老朽化の程度くらいだろう。

どれもこれもが平たく飾り気のない外観をしており、各階毎に三つ並べられた窓とカーテンの柄が僅かなお洒落要素って言ったところかあ？

周囲に並んでるのも似たり寄ったりな建物ばかりだし、なんか本当見てて飽きる風景だな。

しかも路面は異常に汚く、継ぎ接ぎだらけだしさ。路上駐車してる車も俺のだけじゃないし。まあ、お陰で堂々と監視できるわけだけださ。

俺が毎朝心の癒しにしている天気予報の姉ちゃんは晴れだと言っていたが、どういうわけかこの界隈の空は灰色の雲に覆われている。まるで吸い殻みたいない陰鬱とした気分させる、有害物質で構成されていそうな雲だ。

そのせいで街並みも暗く、重いものに見える。呼吸をすれば汚れた空気が肺を満たし、気分を悪くさせる。周辺にたむろするのはシルバークセサリーで飾り付け、黒い服を着た兄ちゃんと、やたら露出の多い服を着なければいけない姉ちゃんばかり。そいつらの顔色も天候のせいか悪く見える。

あたり一帯にはゴミが散乱し、ハンバーガーの包み紙やら、紙袋にビニール袋、挙げ句の果てには誰かの上着まで風に流され汚い路面を滑っていく。

なんか、嫌な場所に来ちゃったな。

こんなところに三十代半ばのおっさんがいるつつうのはなんとも我ながら場違いである。

しかし、暇だな。

朝からここに張っ付いてんだが、全く動きがねえ。本当にここで合ってるのかさえ疑わしくなってきた。

入り口の方もずっと監視してんだが、出てくるのは人相の悪い奴らばかりだ。この辺は本当に治安が悪いな。

ああいう悪ぶってる若者は苦手なんだよな。

目立たないようにしよう。まあ、張り込みしてんだし、目立つちゃいけないんだけどさ。

こう刺激がない時間を過ごしていると眠くなってくるな。眠気を振り払うために缶コーヒーを多めに口へ含む。

舌を刺激する苦みになるべくじつくりと味わう。それぐらいしかすることがないので、もうコーヒー味わって時間潰すしかない。

ずっと見てなきゃなんねえからできることも限られてるんだよなあ。

素行調査つつつても、こんなんじゃ何も分かりやしねえよなあ。

果たしてこんなんでいいんだろうか。

依頼主からは出来る限りでいいって言われたけど、探偵業を始めて長い身の上としてはこうベテランとして十二分な成果を上げてやりたいもんなんだが。

「はあ、退屈な仕事だ」

もう若くないんだからよ。長時間同じ体勢でいるとあっちこちすぐ凝るんだよな。

歩き回ってた方がまだ楽だ。それはそれで疲れるけどさ。

紫煙を味わい、肺にかかる重みを堪能し、煙を窓の外へと吐き出

す。

「けほっ」

路傍から少女が僅かに咽せる声を聞き、俺は跳ねるように窓の外へと身を乗り出す。

「お、悪い……！」

恐らくは俺の吐き出した煙を通り際に吸い込んでしまったのだろう。ハンチングを目深に被った細身の白人女性は、けほけほと咽せながら顔の周りの空気を手で払っていた。

「ちよつと……何……？」

不快そうに顔を歪め、蔑むような目で俺を見下ろしてくる。完全にゴミを見るような冷たい眼であった。しかも腐臭を放つ生ゴミに対しての、極めつけのそれだ。

一部の性癖を持つ者にとっては辛抱たまらないその視線も、ノーマルな俺にとつては居たたまれないものでしかない。

まだあどけなさが残る顔立ちで、どうしてそんな目が出るのか、俺には理解できないくらいである。若い子がそんな目をするもんじやない。

あまりに鋭い視線に気圧されそうになるのを堪えて、俺は努めて人当たりのいい笑みを意識し、顔の真ん中で、右手を縦に翳した。

「悪い悪い。大丈夫だったか？」

目つきの悪い女 いや、少女は値踏みするように俺を睨み付け、やがて鼻を鳴らして腕を組んだ。

どうも幼さがある顔立ちらしからぬ、大人びた仕草をする奴だな。「大丈夫に見えるというのなら、貴方が謝った理由をお聞かせ願いたいところね」

「悪かったっての。な？ この通り」

「どの通りよ」

「いや、そりゃ……」

「アホらし」

ふんと鼻を鳴らして、少女はそっぽを向く。

若い子はどうしてこうやって揚げ足を取るのがうまいんだろうな……。話しづらくてしょうがない。

正直、あまり相手をしている暇はないんだけどな。

「……貴方、倭国^{エイジャン}人？」

「ん？ そうだけど、よく分かったな」

結構他のアジア系の国に間違われたりするんだがな。一発で倭国人と当てられたのは珍しいかもしれない。

ほら、なんだ、華国人とか韓邦人とか、白人から見るとみんな一緒っぽいんだよな。

「ホトケサマに拝むように謝るのなんて日本人くらいでしょ」

「なるほどね。そういう嬢ちゃんは一アリア人だったりとかするわけか？」

白い肌に整った顔立ち、その上モデルみたいに体型、さらには腰まで届く長い金紗の髪に切れ長の碧眼　そこから連想されたものを当てずっぽうで言ってみる。

少女は不服そうに唇を尖らせ、重いため息を吐き出す。

「ご明察。出身は一アリアよ」

おお、意外に当たるもんだな。今日は運がいいのかもしれない。

「貴方のような如何にも間抜けそうなおじさんに当てられるなんて不服だわ」

「うるせえ、まだ三十七だ。おじさんつつうのは俺から言わせりゃ四十になってからであってだな」

「うるさい。聞いていない。どうでもいい。すぐどうでもいいわ」

真っ向からそう言われると、おじさんちょっと傷付いちゃう。

あ、いけね、認めちまった。

「まあ、いいわ。煙草のことは、それで許して上げる」

言って、アリア人の少女は俺の車の助手席を指差す。そこには俺がここに来る途中にコンビ二へ寄って購入した菓子パン二つと、缶コーヒーが三つが入ったビニール袋がある。

張り込みのために準備したものだった。

「これを、なんだよ？ 見せろってか？」

俺のふざけた問いかけに少女は奇々した様子できらきらとした脇髪を指に絡める。

「違うわよ。それを一つちょーだいつて言ってるの。そんなことも分らないの？」

「なんだ、そんなことなら早く言えよ。若い子はしっかり食べなきゃいけないからな。発育にも関わる。どれがいい？ カレーパンとあんパンがあるぞ？」

「別に私が食欲旺盛であるわけではないわ。私は食事なんて好きな人が今家で何をしているのなんてことを考えるくらいに無駄な作業とは思っていないし、録り溜めたドラマを観ながらハンバーガー嚙ってることの方がよっぽど有意義だとも思っているわ。でも私は朝食も昼食も摂ってないの。だから適度に空腹を満たせるものがほしいの。分かったら、さっさとそれをちょーだい。カレーパンをちょーだい」

……長々と話すモンだな。

変にややこしく話すのが最近の若者のトレンドなのか？ 面倒くさいな。

若い子の流行りはよく分からん。

「まあ、別にいいけどよ。ただ飯を抜くのは感心しねえな。ていうかそんならパンなんて食ってねえで、米を食え、米を」

「コメ？ あー、あの白い粒でべちょべちょしてて、大して美味しくないもない倭国の主食のこと？ 冗談はやめてよ。こまこまとしてて倭国の度量の小ささがよく分かるってものじゃない」

はんと大仰に両手を広げて、少女は鼻で笑う。

別に愛国心なんてもんはねえが、そう言われると少し傷付くところもあるよな……。

「あれはしっかりよく嚙んで喰えば美味えの。遠い昔、祖母が俺に作ってくれた塩おにぎりなんて、そりやもつべらばうに美味かったんだからな」

「そのよく噛むっていうプロセスがある時点で全然スマートじゃないわ。倭国人は何でもかんでも周りくどすぎるのよ。それにオニギリってあれでしょう？ あのだだコメを手で寄せ集めて、押し詰めて、固めた奴でしょ？ あんなものを料理っていう倭国の神経が理解できないわ。あとスーシー、だったかしら？ あれなんてオニギリの細長いのに適当に生もの載っただけじゃない。あれで料理とかバカじゃないの？ 笑えてくるわよ。大体、コメにビネガーかけてどうするっていうのよ。生臭いし酸っぱいし、一体何がいいの？ 何？ それが和の心なの？ 倭国人はみんな被虐性癖なの？ それとも何？ 他にまともな食べ物がないの？ 盲人の間では一つ目の男が王になるってことなの？」

「お前んとこのウイナーだつて挽肉、腸に詰め込んだだけじゃねえか。やってることオニギリと大して変わんねえよ。大体、何だよ、腸に肉詰めるつて。とんでもねえスプラッタじゃねえかつ！　なんで本人の肉を本人の腸に詰めちやつてんだよ。惨いにも程があるだろ。何？　思いついた奴はなんか動物に憾みでもあつたのかよ？」

「あれは豚じゃなくて羊の腸よ！　バカにしないで！　下手に上手い反論を考えようとすると、浅学は滲むわよ、おじさん？」

クソ……下手打ちだった。てつきり豚の腸かと思ってたぞ……。

俺三十七年間ずっと勘違いしたまま、生きてたわけ？

「年齢は愚かさから守られないものよ、おじさん。全く、そんなおじさんにウィンナーの素晴らしさなんて到底理解できないでしょうね。きつとワーグナーの素晴らしさも塵ほども理解できず、ただ外面だけで感動しちゃうような人なんでしょ？」

「うるせえ、ワグナーつつたらあれだろ？ はっはーんはんは
っははーんはんはっははーんはんつつ……」

「それ以外は？」

「は？」

思いの外、少女の瞳は冷たかった。

まるで今にも車の窓に手を突っ込んで俺の頭を鷲掴みにし、その

ままドアに叩きつけてきそうな勢いである。

おお……怖い……。

「他は……あー……えーと……なんだろ？」

「ほおら、見てみなさい。所詮その程度の浅い知識じゃないの。笑わせないでよ」

「うつせ、人格破綻者信奉のワグナリアンが」

「またお馬鹿が丸出しですよ、おじさん。火傷した子供は火を避けるって言うけれど、おじさんは一度火傷をした話題で、またそうやって賢いフリをしようとするんですね。ワグナーは人格に欠陥を抱える人物だったからこそ、あのような名曲の数々を生み出すことができたのですよ。あー、おじさんはそもそもワルキューレの騎行くらいしか知らないのだから分かるはずもないですよ」

クソ……この土俵で勝負をするべきじゃねえな。

大体、なんで俺はこんな子供と張り合ってたんだよ……。

大人な対応をしようぜ、俺。

くすくすと唇に指を当てて笑う少女のことなんて気にせず、監視を続けよう。それが一番平和だし、最も大事だ。

「……ほら、これやるからさっさとどっか行けよ」

俺はカレーパンを少女に渡し、アパートの二階へと視線を戻す。

「俺は仕事なんだよ、嬢ちゃんの相手してられるほど暇じゃねえの」

「……仕事中って、路上駐車して、アパート見てるだけじゃないの？ シビメト政権下にジベリアへ送られた兵士じゃあるまいし」

「うるせえな。これが仕事なの」

少女の問いかけに俺は振り返らないまま答える。生憎俺は仕事なので、少女に目を向けている余裕すらないのである。

気を取り直して、俺はコーヒーを口に含んでをアパートを眺める。しかし背中には未だ視線を感じた。なんか背中がちりちりと焼けそう……。

「もしかしておじさん……ストーカーか何か？」

「違えよ！」

なんでそういうことになるんだよ！

「だっておじさんずっとアパート眺めてるだけじゃない。しかもその冴えない、魅力の欠片もなく、枯れ果てたような顔。ストーカー以外に思えないわよ」

「枯れてて悪かったな……」

随分と酷い言われようじゃないか。自分の外見が平均以上とは思っちゃいないが、それでも真っ向からそう言われてしまうと傷付くというものである。

しかし、この嬢ちゃんは本当、言葉に容赦がねえな。齒に衣着せることを覚えるべきだ。今の季節は冬、本当ならもう少し厚着になってもいいべきだというのに、こいつはどこぞの殺しても死にそうな気配が一切ない、禿げた銀幕のスターのようにタンクトップ一枚である。どこのダイハードだ。

「おじさん、警察呼ぼうか？」

「だから違うつつうの。ちゃんとした、まともな仕事だ」

一応遠慮して煙草吸わないでおいたけど、なんかもうどうでもいいや。煙たがって、嬢ちゃんが離れてくれれば、それはそれで有り難いし吸っちまおう。そう思い、俺は取り出した煙草を一本口に咥える。

「……おじさん、同じ過ちを繰り返すの？」

「嬢ちゃんがどこかに行きなさい」

「……呆れたわ……。いい年した大人が」

いいな、子供ってその言葉だけで何でも大人に要求できて。

俺もあと二十歳若かったら、その言葉を有効に使えていただろうに、当時の俺は負けん気ばっか強くてそんな頭の使い方知らなかったな……。

つよくなつてさいしょからつてのをやってみたいもんである。

煙草に火を点ける俺から僅かに距離を置き、それでも立ち去ることとはなく、嬢ちゃんはホットパンツのヒップポケットから携帯電話

を取り出す。

おお、すげえ、あのなんか、タッチ操作で動かすタイプの最新機種だ。えーとなんだっけ……スリムホンとかだった気がする。

多分違う。

若いのすげえ。

おじさん、未だに二年前の携帯電話使ってるのに。

「ていうか、おいおい、警察とかマジに呼ぶなよ？」

「呼ばないわよ、馬鹿馬鹿しい。別におじさんが誰ストーキングしてても私には関係ないし」

「だからしてねえつつうの！」

「いい年したおじさんがぎゃーぎゃー喚かないで、鬱陶しい」

……誰のせいで声を荒げなければいけなくなっているというのか……。

全く、これだから若い子は面倒くさいのである。

嬢ちゃんはやケータイの画面に何度か触れ、何かを確認したと思うと、すぐにケータイをヒップポケットへと戻した。

「じゃあ、おじさん。もう二度と会わないことを祈ってるわ」

どうやら、もう行く気になったらしい。どこへなりとも消えればいい。

俺はちゃんと俺の仕事に専念したいのである。若い子に付き合っている暇はない。

シートに深く腰掛け、俺は煙草の煙を運転席側へと吐き出した。

もうなんか疲れ切っていた、精神的に。

帽子の位置を直し、歩き出した少女はしかし、すぐに立ち止まって、俺の方へと視線を戻した。

「あ、それと、カレーパンのお礼に警告してあげるわ。おじさん、もう少しでここ、騒ぎになると思うから離れていた方がいいわ。そうね、場合によると、ターミネーターが最初に現れた場所で衣服を調達する時程度の騒ぎにはなるんじゃないかしら？ 私個人としてはトムとジェリーの追いかけっこ程度には収めるつもりだけど、念

のため逃げていた方がいいわ」

「は？」

「特にあのアパートメントには近付かないこと。いいわね？」

そう言つて、嬢ちゃんが顎で指したのは俺が現在監視中のアパートだった。

……頭が痛くなつてきた……。

俺は吸いかけだった煙草を携帯灰皿に押しつけて、乱暴に火を揉み消し、言いたいことだけ言つて満足そうに去つていこうとする嬢ちゃんを追つて、急いで車から降りた。

白い石畳で舗装された歩道に脚を付け、ずっと座りっぱなしだったためにぎこちない筋肉を何とか動かし、俺は少女の細い背中を追いかけた。

「おいおい嬢ちゃん、ちょっと待てよ」

トレンチコート越しに肩を掴み、少女を止めようとする、すぐさま手を払いのけてくる。

「触らないでください！ ストーキングの次はセクハラ行為？ 本当やめてください」

振り返つた嬢ちゃんはきつと切れ長の鋭い碧眼で俺を睨んでくる。相当お怒りらしく、頬は紅潮している。

ちよつと触つたくらいでここまで怒るとは、本当最近の若い子は怖いな。

その目力についつい俺も気圧されてしまう。

「あ、いや、そういうわけじゃなくてさ……」

「じゃあ、なんですか？ これ以上関わらないでくれませんか？」

「そうは言つてもだな、俺もあそこに用があるんだよ。面倒事を起こされちゃ困る」

ありのまま起こつたことを報告すればいいんだろうが、それも何か腑に落ちない。俺は対象の日常生活を調べなければならぬんだ。非日常の出来事を報告したところでしょうがない。

「だったら、さっさと行けばいいじゃないですか！」

「いや、だからよ、そういうんじゃないって……」

あー、クソ……なんて言ったもんなのか……。

あんま不用意にバラしたくはねえんだよな、職業。面倒くさいことになってきたぞ……。

俺のことを真っ向から見上げてくる嬢ちゃんは、両手を握り締めていて相当感情的になっている。白状しなければ引き下がらなそうでもある。

はつきりしない俺の態度に痺れを切らしたのか、嬢ちゃんはふんと鼻を鳴らすと、長い金色の髪を振るように勢いよく俺に背中を向け、再び歩き出そうとする。

「おい、待て待て待て！ 待てて！」

「鬱陶しいです。声をかけないで」

冷たく吐き捨てた嬢ちゃんは編み上げブーツで荒々しく地面を踏み締めて進んでいく。車道を渡る前に、左右から車が来ないことを一度しっかりと確認してから、一步を踏み出したその時

渴いた銃声が俺達の耳を貫いた。

俺や嬢ちゃん、周りにたむろしていた悪ぶった外見の若者どもが一斉に同じ場所を見やった。

そこは俺が今までずっと眺めていた場所だった。ずっと俺が監視していたアパートから、銃声は聞こえた気がする。

正確なことは分らない。

しかし、多くの者達がその一点を見つめている以上疑いようはない。

耳に奥に未だ残り、痛みを残す銃声。

一般人の銃の所持が禁止されている故郷じゃ銃声なんてものを聞く機会はなかったが、この国に来てからはもう随分と聞き慣れてしまった。それでも、こんな場所で銃声を聞くことになるとは思っていなかった。

確かに治安が悪い場所ではあるが、若者達は表面上は悪ぶっているが、その多くが大抵小心者である。本当に銃を撃ったことがある

奴なんてまずいないだろーし、中には人を殴ったことさえない奴だっているはずだ。

故郷では内弁慶と称されるような奴らが大半であることを、俺はなんとはなしに理解していた。そんな風に思っていたからこそ、この圧倒的な暴力の音は予想外であった。

周囲がどよめく。

若者達が狼狽えている。

近くのアパートの住人達も音を聞きつけて、少しずつ出てきていた。

狼狽と恐怖は次から次へと伝播していき、好奇心から野次馬が集まり出す。

まずいな、騒ぎになりそうだ……。

そこで、俺はふと嬢ちゃん言葉を思い出す。

もう少しでここ、騒ぎになると思っから離れていた方がいいわ。

……今がまさにその状況じゃないのか？

まさか、こうなることを知っていたのか？

嫌な予感がした。まさかと思いつつ、俺は嬢ちゃんへと目を向ける。

少女は目を見開き、アパートを見つめている。驚きに瞳は震え、口を薄く開いたまま、ただ呆然とアパートを見つめていた。

「おい……お前まさか……」

こうなることが分かっていたんじゃないや……。

そんな問いを投げかけるよりも早く、少女は小さく舌打ちをしたかと思うと、きつとアパートを睨み付け突然走り出した。

あろうことかアパートへ向かって。

「お、おい！」

俺の呼び止めなど聞くことはなく、嬢ちゃんは一目散にアパートへ突っ込んでいく。

伸ばした手は虚空を掴み、嬢ちゃんを止めることはできなかった。

おいおい、銃声が聞こえたんだぞ？

当然厄介なことになっているに決まっている。そんなところに乗り込んで、一体どうしようっていうんだ。

場合によっては銃の持ち主と遭遇することになるんだぞ？ もし事件が起こっていて、その犯人がいたとしたらどうするつもりなんだよ……。

「……………たく！」

俺は嬢ちゃんを追って走り出していた。

なんてお節介だろうか。

あいつは感じの悪い小娘だし、俺をストーカー扱いした挙げ句、セクハラだとか難癖をつけるような生意気な奴だ。

止めに行く義理はない。

それでもあの子は、カレーパン程度の義理で、よくは分からないが警告をしてきた。してくれたのかもしれない。それを有り難いとは思ってないし、未だに意味だつて分かつちやいないが、それでも義理を返した奴のことを見捨てるわけにはいかないだろう。

いや、そんなのはただの理由付けにしか過ぎない。俺はただ、関わった人間が死ぬのがいやなんだろう。

短い階段を跳ぶように駆け上がり、アパートの入り口の扉を強引に開け放ち、中へと飛び込む。

入るなりカウンター越しに管理人と思しき老婆が何かを喚いているが、聞き入れてる余裕はない。

俺は老婆の囁れた怒鳴り声を無視して奥へと進んでいく。

エレベーターは一階で止まっている。階段を昇っていったか？

エレベーターに乗ってる余裕はない。即座に判断し、方向転換。俺は階段を駆け上がる。一段飛ばしで階段を昇り、踊り場は掴まった手摺りを中点に弧を描くように抜け、さらに階段を駆けける。

飛び込むように廊下へと辿り着き、左右を見回すとすぐに嬢ちゃんは見つかった。

二〇三号室　　あろうことか、俺が監視を続けていた部屋の前で

少女は立ち尽くしていた。

「おい！」

俺が呼びかけても嬢ちゃんは何も答えることもなく、俺を見ることもない。仕方なく俺は傍へと駆け寄った。

「おい、こんなところは危ねえから早く出るんだ」

「……………」

嬢ちゃんは答えない。ただ開け放たれた部屋の入り口の前に立ち、部屋の中を見つめている。

一体何がどうしたっていうんだよ……。

そう思いながら部屋へとふと目をやって、俺もまた嬢ちゃんと同じように固まってしまった。

入り口のすぐ先には故郷でいうところの四畳半程度の部屋があった。部屋には棚やら本棚が設置され、さらには物も散らばっているせいで余計部屋が狭く思える。

本棚に詰め込まれていただろう本の大半は床にぶちまけられ、それ以外にも様々な小物が床には散乱していた。メディアで言うところの争った形跡の模範ともいえる状態だ。

しかし俺を硬直させた原因はそれではなかった。

部屋の中心には鮮血がブチ撒けられていた。床に血が飛び散り、ピンク色の何かの破片もあった。一番奥の壁には、べつとりとペンキを塗りたくったような鮮血が飛び散つてもいた。

これは、間違いなく殺人現場だった……。

さらに目を凝らすと真つ赤な硬貨が部屋一面に散乱していた。恐らく被害者の血で染まったものだろう。

……………ちよつと待て。

ここは疑いようのない殺人現場だぞ？

肝心の死体はどこにいったんだ？

そんな疑問を抱いた、ちょうどその時だった。突然嬢ちゃんは俺の眼前を通過し、走り出していた。

「お、おい！」

呼び止めても一切反応を示すことなく、嬢ちゃんは機敏に階段を駆け上がっていく。

俺もその後を追って、やむを得なく走り出す。

「もういい歳なんだから、無理させんじゃねえよ！」

悪態をつきつつも、俺の身体は少女の背中を追っていた。階段を昇り、踊り場を通過し、さらに階段を上がって三階へと至る。

嬢ちゃんは階段を昇った先で左右を見回し、やがて小さく舌打ちをした。

「どうして……？　いない……！」

低い声で唸るように吐き出し、少女はもう一度周囲を見回す。

斜め後ろに立った俺は、僅かに見えたその形相に声をかけることさえ戸惑ってしまう。

目玉が飛び出しそうなほどに目を見開き、歯を食い縛り、ぎらぎらとした眼光を放って何かを必死に探しているその形相　まるで餓えた狼のような眼に、俺は戦慄していた。

一体、どんな人生を歩んだら、その歳でそんな表情ができるんだか……。

「おじさん。このアパート、屋上は？」

「え？　あ、いや……　なんで俺に聞くんだ……？」

上擦った声で動揺しつつも何とか答える。嬢ちゃんの低い声に怯えたとか、そういうことは全然ない。

「ストーカーなら、分かってるでしょ？」

「ストーカーじゃねえよ！　……エレベーターでしか行けない屋上が一応ある分にはある……」

一応、張り込みをする前に下調べはしてあったから、分かっている。答えるとストーカーのレッテルが定着する気もしたが、今はそんなことを言っていられる場合でもないだろう、

嬢ちゃんは何か小さな声で吐き捨てると、すぐさま廊下の中央のエレベーターへと向かった。

今、なんか若い女の子が言っちゃいけないような卑語を言い放っ

た気がするけど、まあ、考えないでおこう……。

嬢ちゃんは何かに追い立てられるように、落ち着きなくエレベーターの昇りボタンを連打する。生憎エレベーターは一階で止まっているため、すぐさま来る様子はない。

ただでさえ古くさくてぼろいアパートのエレベーターだ。もう随分と古い物だろうから、動作も遅い。

嬢ちゃんはエレベーターのアコーディオンドアの前で腕を組み、苛々とした様子で、忙しなく床に敷かれたカーペットを爪先で叩いている。

分かりやすいほどに動揺していた。

「おい、お前、何が起こったのか分かってんのか？」

「ストーカーさんには関係ないことよ。大体、なんでここにいるの？ 無関係なおじさんはさっさと家に帰って、MYPDブルーの再放送でも見ていればいいわ」

「お前は無関係じゃねえっていうのか？」

「答えたくはないわ」

俺の問いかけに嬢ちゃんはエレベーターの扉を見つめたまま冷たく答える。

切羽詰まってるらしく語調に余裕はない。冷静を取り繕ってはいるが切羽詰まったように聞こえる。まあ、落ち着きないこの子の拳動からの思い込みなのかもしれないが……。

「答えないなら、俺もついていくぞ。嬢ちゃんが俺の質問にちゃんと答えない以上、俺も嬢ちゃんの指示に従う義理はない」

嬢ちゃんの今の様子を見れば、呼び止めたところで意味はないことくらい分かった。ならばせめて、嬢ちゃんが無駄死にしないようにしようと思った次第だ。

嬢ちゃんは低く唸り、やがて盛大なため息を吐き出した。

「もう疲れたわ。勝手にして」

不服ではあるが異論はないらしい。

ちょうどその時、チーンとエレベーターから音が鳴る。エレベー

ターの籠が到着したようだ。

押し入るように嬢ちゃんは素早く乗り込み、後続くように俺も入っていく。すぐにエレベーターのアコーデオンドアが閉まり、エレベーターはゆったりと上昇を開始する。

俺はエレベーターの右側に立ち、嬢ちゃんはエレベーターの左側の壁に背中を預け腕を組んで俯いている。

なんとも居たたまれない空間だな。空気が刺々しい。

どうにも落ち着かず、なんとなく顎を擦ると無精髭のじりじりとした感触が指に刺さった。大分伸びてきたな……。

最近はいろいろ忙しくて剃ってる暇がなかった。

そのうち気が向いたら剃ることにしよう。こういう風に無精者が生やす髭だから無精髭っていうわけだよな、うん。

エレベーターは存外早く、しかし一般的なエレベーターよりは遅く、屋上へと到着した。

アコーデオンドアが軋みを上げながら開き、曇天の空が再び見える。

低い空がさらに近づき、閉塞感さえ覚える空間。

周囲には同じような高さのアパートが並び、遙か向こうにようやぐビル群が連なっている。まるで空に押し込められて縮こまってしまったような街並みだ。

エレベーターの籠から出ると、冷たい風が吹き荒び、耳元で荒々しい唸りを上げる。

塔屋以外には凹凸のない、平たい屋上を中心、冷たく殺伐とした不穏な空気の只中に、誰かがいた。

細い、人影だった。

そいつは陽気に鼻歌など歌いながら、片手に刷毛を持ち、屋上の床に何かを描いていた。

中腰になって刷毛で床をなぞり、途中途中で全体を確認し、バランスを考慮しつつ陽気な音を奏でながら何かを描き続けている。が、刷毛に染み込ませたペンキが足りなくなったのか、その影は屋上の

中心へと戻り、刷毛を何かに突っ込む。

それは……死体だった。

死体の腹部は大きく斬り裂かれており、その縦の亀裂に刷毛をねじ込んで、影は血を染み込ませていた。

なんだ、この光景は……。

一頻り刷毛が血を吸ったのを確認して、立ち上がったところで影は俺達の存在に気付いた。

「おや？」

男性の声だった。一度聞けば男性だと分かる反面、男性にしては少し高い、優男らしい声だ。

「これはこれは、すまない。今はまだ作業の途中なんだ。もうしばし待っていただけないだろうか？」

「残念ならがその頼みを聞き入れることはできないわ」

低い声で言い放ち、俺の隣に立った嬢ちゃんはトレンチコートの懷に手をつ突っ込んだかと思うと、即座に何かを引き抜き、細身の影へと向けた。

黒く金属質な冷たい輝きを宿す、何かがその手にはあった。

考えるまでもなく、それは銃であった。

二度目の銃声が薄暗い空の下で響き渡る。

間近で響き渡った銃声が左耳から入り込み、脳ミソの芯を揺さぶり、右耳から抜けていった。

衝撃さえ伴った轟音に一瞬眼を閉じ、すぐに俺は目を開いた。

その時にはすでに弾丸が刷毛を持った人影の心臓を撃ち抜いていた。

刷毛が手から零れ落ち、死体の胸の上に落ちる。

細い身体は後ろに傾ぎ、ゆったりと、静かに倒れていく。

……息を呑んだ。

あまりの突然の事態に理解が追いつかない。

一体何が起きているというんだろうか？

まるで時が引き延ばされてしまったかのように、時の流れは緩慢

だ。

雲越しに染み込む光さえ鈍く、銃声の残響はいつまでも消えず、曇天の下、倒れていく男の姿さえ遅い。

あともう少しで時が止まってしまふと思った刹那、倒れかけていた身体 of 左足が引かれ、地面を力強く捉える。

心臓を撃ち抜かれたはずの人影は　死体になったはずのそいつは倒れる寸前で踏み留まった。

俺は再び息を呑む。

目を睜った。

その男を凝視した。

振り返らせた身体を引き戻し、後方を向いていた頭が弧を描き俺達の方へぐわりと引き戻される。

目を見開き、そいつは擦り切れたような声で微かに笑った。

「危ない危ない。直撃したら死んでしまふところでしたよ！」

直撃したら？

直撃しただろうが。

よりもよって心臓を撃ち抜かれただろう。

なのになんでこいつはまるで当たっていないかのように振る舞う。目を凝らせば、そいつの纏ったダッフルコートの胸元に風穴が開いているのだって見て取れる。

間違はなくあいつは心臓を撃ち抜かれたはずなのだ。

なのに、どうして生きている？

当たっていないなどという意味不明なペテンを続けている？

「いやはや、実に早急だ。要はそこまでして、私をやっつけたいということなんですね。なんとも潔く、早計で、尚早で、また的確な判断だろうか。いや、まっこと素晴らしい。身震いするほどに愚かな速さであり、身が竦むほどに賢い遅さだ。我々の起こす我々のための戦端をこんなにも早く止めようとするとは何という愚かしさか。全ての手筈が整った今更の今、その出鼻を挫こうと画策するとは何たる賢さか」

喘息患者の咳のような笑い声を上げて、そいつは白い手袋に覆われた手を打ち合わせる。

ぱんぱんという、先程までの銃声とは異なり穏やかな破裂音が屋上に響き渡る。

そこに至って、俺はようやく男の姿を認識する。

癖の強い縮れたような黒髪を後ろに撫でつけた、色黒の肌の男だった。

纏ったダッフルコートは前が開かれており、その向こうに丁寧に着こなしたスーツが見て取れる。細い身体に沿うようなシルエツトスーツだった。

顔立ちは彫り込みの深い西洋人らしいもので、細い顎や高い鼻梁、出張った眉に高い頬骨　外人らしい何とも整った顔立ちをしている。

先程までは穏やかだった金色の目は、眦が引き裂けそうなほどに見開かれ、露出し充血した眼球が俺達を凝視していた。

「ブラボーブラボー！　実にいい！　とてもいい！　我々の開幕式の障害となったことも一笑の内に許せるほどのバカらしさだ。最早、その罪科などヴェルタースの包み紙よりも軽いことだろう！」

拍手喝采された嬢ちゃんはまだ銃を下ろしていなかった。

銃を男に向けたまま小さく舌打ちをしたかと思うと、次の瞬間には間断なく三度銃弾を男へと放っていた。

重なり合わせて耳朵を叩く渴いた音に視界で火花が散る。それでも俺は瞼に力を込め、耳を貫く音に耐え、目を見開き続けた。

今度こそ、銃弾の行く先を見届けるために。

銃弾は男の腹部、胸の中心、太股を確かに貫いた。貫いたはずだった。いや、事実貫いた。そうであるはずだ。

だというのに鮮血が舞い散ることがなければ、内臓をプチ撒ける音もなく、今度は男の身体が傾くことさえなかった。

男はまた擦り切れた笑い声を上げる。

「いけませんね。それはいけない。それではいけない。そんなこと

ではいけません。それはあまりにもつまらない。それはどこまでも見境無く、見劣りする。先程のように鮮烈な一発でなければ、何百発何千発、何万何億何兆何京発撃とうと萎えるだけではありませんか。それは勿体ない。実に勿体ない」

「黙れ！」

再び引き金が引かれ、弾丸は螺旋を描きながら男へと突進する。空を穿ち、二人の間の距離を翔破した鉛玉が男の浅黒い眉間を貫いた。

しかし男は衝撃に反り返ることもなく、ましてや頭の風通しがよくなることもなく、高らかに掠れた声で笑う。

「まだ臆さない。まだ怯えない。まだ戦かない。まだ恐れない。未だ怖れず引き金を引いている。それも理性的に。素晴らしい、フロイライン。君は素晴らしい」

ぱんぱんと二度手と手を打ち合わせ、男は悠然と両手を広げてみせる。

穏やかに、まるで全てを受け止める伴侶のように、その身体を開く。

「オープニングセレモニーを台無しにされた価値があったというものです。いや、本当に今日は素晴らしい日だ」

色黒の男はゆっくりと後方へと歩き出す。

逃げるようにじりじりと、それでいて誘うようにゆったりと、別れを惜しむようにのんびりと、男は後退していく。

「逃がすか！」

吠えるように叫んだかと思えば、少女はさらにトレンチコートの懷から新たに銃を引き出した。

二丁の拳銃を構え、少女は迷わず引き金を引いた。

両手に構えた銃から火花が散る。重なり合った銃声が耳を打つ。

二倍の銃弾を身体に受けても、男は怯まない。確かに直撃しているように見えるというのに、男が血を流すことはなく、服に穴が空くこともなく、全ての弾丸が男を通り過ぎていく。

まるで屋気楼を撃っているかのような感覚。

そこに男が存在していることさえ疑わしく思えてしまう。

狂いに狂った荒唐無稽の白昼夢。

ただ銃声だけがリアルで

途切れることなく続くその音が脳を揺らすことで今が現実なのだということを思い知る。

その間にも男はゆっくりと後退していき、やがて、その片足が屋上の端へとかけられる。

屋上の周囲には柵など設置されておらず、僅かな出っ張りがあるだけだ。あと一步下がれば、男は間違いなく転落するだろう。

三階建てのアパートの屋上からの落下。運が良くても、重傷は免れないはずだ。だというのに、男は未だ動揺などなく、微笑んでいる。

絶え間なく放たれる銃弾は正確に男の身体を撃ち抜いていく。しかし未だに一つとして、銃弾は彼に当たってなどいない。

なんていう矛盾だ。

わけがわからない。

「抵抗とは若さの華。実に素晴らしい。その荒削りな勇猛さは新兵のそれだ。運がよければ戦場で勝手に死にきる。運が悪ければ将校にも上り詰められるだろう」

目を細め、今この瞬間にも自分を殺そうとしている少女を慈しむように見つめ、男は両足を屋上の端に揃えた。踵はすでに地を掴んでおらず、体重を後ろにずらせばなんなく身体は落下を始めるだろう。

「君が絶望的にツイていない薄幸なる者であることを私は祈ろう」
くすりと笑ったかと思うと、男の身体がふわりと浮いた。身体が後方へと傾いていく。

コートの裾が吹き上がった風に膨らみ、翻った。

今まさに転落しようとしているその時になってもなお、男は決して笑みを絶やすことはなく、俺達を見つめていた。

「私はコード《ロキ》　一〇の二十四乗分の一以上の確率を渡り歩くペテン師にして、ケベンハウナー一七八番目の忌み子、辺獄の^{ヴァルハラ}決死軍第六部隊隊長《空を歩く者》！　記憶せよ！　我がコードを！　奮起せよ！　最初の敵性者よ！　私を仕留め給え！」

高らかに宣言し、ロキと名乗ったその男は哄笑と共に落ちていく。まるで寝台に飛び込むように、何を怖れることもなく、地上へと落ちていく。

その双眸は、最後の最後、屋上の床の向こうに消えるその瞬間まで俺達を見つめ続けていた。

やがてその喘息患者のように擦り切れた哄笑が消えるその時まで、俺と少女は呆然と男がいた場所を見つめていた。

死体と俺と少女だけが残って、後には何もない。

吹き荒ぶ風の冷たさにか、恐怖にか、身体は震え続けていた。

そのままじっとしていることも出来ず、銃をトレンチコートに突っ込む少女の脇を駆け抜け、俺は屋上の端へと向かっていった。

ちょうど色黒の男が落ちていった場所まで向かい、そこから眼下に広がる地上を見下ろした。

屋上の端に載った自分の爪先の向こう、目眩を覚えそうなほどに離れた地面を睨むように見つめる。

建物と建物の隙間に生まれた細い路地は薄暗く、生ゴミの詰まったビニール袋が山を築いていた。

剥き出しの地面は陽がずっと当たらないためか湿り気を帯びている。

両側の老朽化して剥げた壁にはガスパ管が張られ、これを上手く使えば十分安全に降りることもできるだろう。下の生ゴミたちがクツションになれば、幸い一命を取り留めることもできるかもしれない。だが、そこまで考えても納得がいかない。

どうして、誰もいない？

ゴミの山が荒らされた形跡もないし、古びたガスパ管を使うにだって限度がある。

何よりあいつの笑い声は突然、消えるように途絶えた。何かが地面に叩きつけられるような音も聞こえなかった。
どうしてだ？

何故、逃げ行く背中さえ見えないんだ？

あいつは どこに消えた……？

ウィグナーの友人のトラブル

一日の終わり、行きつけのバーで飲む酒はその日起こったことの集約だと俺は思う。辛いことがあった日の酒は辛く、喉を焼くのが苦しい。それを重い気持ちの味わいとして飲み干すことに躍起となってしまう。楽しいことがあった日の酒は最高に美味しく、後先考えずに飲み続けてもつと楽しい気分になろうとしてしまう。

いずれにせよ、酒は一日の締めくくりとして、見合った味を俺達に提供してくれる。その味わいと共に一日の出来事を思い返し、受け容れがたい辛い出来事があつたとしても酒と共になら嚥下できる。

アルコール万歳、である。

しかし、今日ばかりはどうにも酒が進まなかった。奇妙な一日だったからなのだろうか。

何もかも訳の解らないことが連続して起きたせいだろうか。

日中の出来事は徹頭徹尾、俺の理解には及ばないものだった。正直未だに混乱している。

なんとか落ち着いたフリをして、日常の自分をなぞっているが、頭の中では未だにあの出来事のことばかり考えていた。

一体、あれはなんだったのだろうか？

死体のない殺人現場。

屋上に描かれた血のペイント。

何の躊躇いもなく発砲する少女。

撃つても死なない男。

一体、何がどうなっているんだか。

変な夢でも見た気分だし、変な夢だったのなら、笑い話にも仕立

て上げられただろうが、どういうわけかあれは現実だ。

惨状の広がる部屋から溢れ出る、酸っぱそうな血の臭いは今も覚えていいる。間近で聞いた銃声の衝撃もまだ残っている。

あの男の擦り切れた笑い声も耳鳴りのようにちらついて煩わしい。そんなもんばかりが頭の中を巡っているせい、全然酒を楽しめていなかった。

ただ喉を焼くばかりの焼酎を口の中に流し込み、ロックグラスになんとか視線を落とす。透明な液体の注がれたグラスの中にはボール型の氷が沈んでいる。少しグラスを傾けるとコロコロと転がり、グラスの中で澄んだ音を立てた。

少々手狭ながら小洒落たバーのカウンター席の隅っこで俺は独り芋焼酎を煽っていた。

間接照明を主としているために店内は薄暗く、隅の方は深い暗闇に紛れている。辛うじて、隅の席に座った客の存在が分かる程度の明るさだ。全体をあえてはつきりと照らしていないことで、闇の向こうにまだ何かが広がっているような錯覚を受け、本来よりも空間的なゆとりを感じる。そのためこのバーは外からの狭苦しい外見に反して、どうにも広く感じてしまう。とはいえ実際に空間が広がっているわけではないため、店は現実問題狭い。ただ、正直、このバーはそんなに繁盛しているわけではないから、いつも客が疎らで窮屈な思いをすることもないだけだな。

カウンターにいるマスターは他の客と何やら談笑しており、俺には一切興味がないう様子だ。まあ、結構常連だけどそんなに話さないからな、マスターとは。二言三言、注文以外で言葉を交わせば多い方だ。

天井から落ちる絞られた光に照らされ、手元のグラスの中で氷が煌めいている。その様をなんとなく見つめ、俺は息を吐き出す。

客同士の話し声はささやかで、店内に染み渡るようにひっそりと流れるジャズの旋律もあって、話している内容までは聞き取れない。人気があって、それでいて静かで、落ち着くバーだ。特にこのカウ

ンター席の隅っこは人目に付きにくく、独りではなく一人の時間を穏やかに満喫できる。誰にも邪魔されることがなく、また誰かに気を遣う必要もない。

一日の締めくくりには持つてこいの場所だと思っている。

……しかし、なんだかな。

今日はその一人の時間つてのがどうにもしっくり来ない。入り込めないっていうか、頭の中がうるさすぎた。

結局、今日のアレはなんだったんだかな……。

市警が来る前に、半ばあの少女に背中を押されながらあの場から逃げたが、もしかすると何かまずいことに関わってしまったんじゃないだろうか。

一時の感情で変なことに首を突っ込むべきではなかった。

実際、俺がいなくてもあの子は十分身を守れたし、それどころか可能ならば殺しかねない勢いだっただけ。

いや、実際、殺すつもりだったんだろな。

あの男と対峙した時の、少女の顔を思い出す。

あれは完全にあの男を殺すつもりだった。もし誰かが阻むようであれば、その誰かさえ躊躇いなく殺してしまいそうなほどの執念があった。

屋上に行く前から見せていた焦りを見るに、あの場所に男が現れることをあの子は予め知っていたのかもしれない。元々あの男を殺すつもりであの場所に赴いていたのか。

となると、あの子が言っていた騒ぎというのは、そのことだったわけなのか……。

じゃあ、なんで、素行調査の対象は殺されたんだろな……。

何かよからぬことに首を突っ込んでしまったことで殺されたのか、それともツキに見放されたのか。

……本当、何から何まで謎だらけだな。

考えてもしようがないことは分かっているんだけどな。

俺は啜えた煙草に百円ライターで火をつけ、紫煙を天井に向かっ

て吐き出す。

落ち着かねえな、どうにも。どうせ何かが分かるわけでもないし、こんな少ない情報で推理できる事柄でないことも分かりきってる。

そうだよ、考えたところでどうにかなるわけでもない。

ないんだけどな……。

少しでも気を紛らわせようと、俺は椅子の背凭れにかけたコートから携帯電話を取り出した。二年も前に発売されたストレート式でフラットなデザインが印象的な、黒い端末だ。ずっと使い続けているせいで、充電の保ちは悪くなってきたが、それでもそこそこ使えてしまうので未だに買い換えられずにいる。本格的に支障が出てきたら買おう買おうと考えているのに、その都度まだ大丈夫だとかまだ使えるだとか誤魔化して先延ばしにしまった結果がこれだ。

最近の携帯電話は充電の残量が細かくパーセンテージで表示されるらしいが、未だに俺の携帯電話は三段階のみである。しかも残量が三から二になった後、一になるまでのペースが異常に早い。絶対これ割合おかしいと思う。

残り僅かな充電を気にしつつも携帯電話のサイドキーを押し、液晶を点灯させる。眩しすぎる光を受け、暗闇に慣れていた目が痛みを訴えてくる。

新着メールは一件。

常日頃からマナーモードに設定しているため、ポケットに入れておくといつも着信に気付かないんだよな。メールの受信時間は一時間前。悪いことをしたな、と思いつつ差出人に目をやると、仕事の関係でいつもお世話になっている女性からだった。

あ、罪悪感消えた。

微塵も残さず罪悪感が霧散したわ。

あの女を一時間放置したところで、どうってこともないだろう。なんなら、少しいいことをした、とさえ思ってしまうほどだ。

なんたってあの女は性格が悪い。驚くほどに悪い。捻ねながらこの世に生まれてきたと思えるほどに、あらゆるものがねじ曲がって

いる。母親の胎内に良心というものを忘れてきたに違いない。成長過程で何があっても、あんなに性格が悪い女にはならないことだろう。

そんなことを思いながら、俺は一時間じつくりと寝かせたメールを開封する。

『面白い情報を仕入れた。明日、いつもの場所に』

「……………」

恐怖の呼び出しメールに背筋が冷たくなり、俺は思わず固唾を呑み込んだ。こうやって呼び出しメールが来た場合、俺はいつも酷い目に遭っている。メールに従いあいつの元を訪れれば当然酷い目に遭うし、身を守るために無視を決め込むとやがて災難が向こうから黒服纏ってやってくるのである。

……黙って従った方がまだ優しい、か。

とりあえず了解の意を伝えるメールを手短に返信し、俺は携帯電話をコートのポケットへと戻した。

その直後、見計らったようにバーの入り口が開かれる。古びた蝶番が悲鳴のような軋みを上げ、扉の上に設置された鈴が鳴る。

入ってきたのは紺色のダッフルコートを着た、大柄な黒人だった。岩のようにごつごつとした厳つい顔つきで、眉間には深い皺が刻まれている。しかもスキンヘッドだ。普通に怖い。肩とか胸とかにハートの刺青があっても全然不思議ではないだろう。

筋骨隆々とした巨躯は背丈も高く、絞られた目はありとあらゆるものを睨み付けるように、店内を見回している。

黒い巖のような男は、俺を見つけると眉を僅かに動かし、こちら側へと向かってくる。カウンターの横を抜ける際にマスターへ地鳴りのように低い声で何事か呟き、そのまま俺の隣まで大幅ながらに静かな足取りでやってくる。

「遅くなっ たな」

「ああ、いいってことよ」

そいつの野太く低い声に、俺は曖昧に笑って手を振る。

学院時代からの親友で、今は飲み仲間のデビツクだった。

「少し厄介なことになってな、仕事が長引いてしまった」

「そんなこったろーと思ったださ。お前が時間を守れない理由なんて仕事くらいなものだ」

「職がありながら、いつも一番乗りのお前も大概だがな」

皮肉を言いながら、デビツクは手に嵌めていた黒革の取ってコートのポケットへ突っ込んだ。その後ダツフルコート脱ぎ、椅子の背凭れに引っかける。中に着ていたよれよれの背広は、デビツクの逞しい身体には少々窮屈そうである。本気で力んだら、間違いない服が引き裂けるだろう。

いや、少々誇張か。

まあ、ぶちぶちと糸の切れる音は鳴りそうだが。

カウンターと椅子の隙間にでかい身体を押し込み、デビツクはマスターから注文していたハイボールを受け取る。

「カニスはどうした？」

「カニスは追悼式に行つて、古い知人に会ったからみんなで飲みに行くつてさ」

デビツクの問いに答えた俺は肩を竦めて苦笑する。背中を丸めてハイボールを喉に流し込んだデビツクもまた渴いた笑いを零した。とはいっても口角を僅かに上げるような、ほんの微かな笑い方だが。

「律儀なものだ、あいつも」

「ホントにな。なんでそんな好き好んで、あんな湿っぽいのに出るんだか」

「お前が行かないから、その代わりなんだろう。あいつはああ見えて、周りを見ている」

「頼んでねえのにな。あ、すみません、鶏皮お願いします」

「ああ、ついでにカマンベールフライも」

ちょうどマスターが手前に来たのでつまみを注文をしておく。粛々と注文を受けたマスターはすぐに厨房の方へと向かっていった。

「で、今日遅れたってことは、なんかまた厄介な事件でも起きたの

か？」

「まあ、そういうとこだな」

デビツクの眉間に刻まれた皺が一層深くなり、低く唸るような声を上げる。

珍しくない話だ。

この街にはトラブルが溢れ返っている。腐るほどあるといってもいい。腐ったそばから新鮮なトラブルが入荷してくるのがこの街だとも言える。平和だけが常に品切れ状態だ。

夢と希望に満ち溢れた自由の街、インノルム そんな謳い文句を信じて、いろんな輩が希望や野望を胸に抱いてここへやってくる。経済発展も著しく、生活水準も軒並み高い。人種国籍も違う人々が行き交い、様々な文化が入り乱れている。この街に来て夢を掴んだ者達だつて多い。そいつらのサクセスストーリーに魅せられて、その後が続こうとする若者達は後を絶たない。

でも、現実はその重くない。

数多くの成功者の下には、それ以上に途方もない数の失敗者がいて、夢破れた者達は時に街を去り、時に命を絶ち、時に社会の暗部に紛れ込み、時に過った途に進む。そういった輩で氾濫しているのが、この街の実情だ。

大いに脚色された華々しいビッグドリームなんてのは、この街の側面の一つにしかすぎない。

それを分らない奴が、多いんだよなあ。

「すでに報道されていることだ。隠す必要もない、か。今日三つばかり厄介な事件がほぼ同時に起きてな……てんでこ舞いになっている」

「三つ？」

こりゃ驚いた。俺はてつきり、あの事件のせいだと思っていたんだがな……。

「一つ目は爆破テロ予告。セクター二の第六区スナイプの駅へ、構内に爆弾を設置したとの電話があったそうだ」

「なんだ、随分と穏やかじゃねえな」

「偶然なのか狙ったのかは知れないが、カルデジアンビルでの自爆テロ事件があった日と同じ日付だ。当然、厳戒体制で事に当たったが、しかし肝心の爆弾はなし。犯人の手がかりもなし。爆破予定時刻を過ぎても爆発が起きることはなく、時間が浪費された。また、セクター二全体の電車が結果的には止まり、経済的打撃は相当なものだろう」

「骨折り損のくたびれもうけって奴だな」

「全くだ」

ため息を吐き出し、デビツクは大量のハイボールを口の中へと流し込んでいく。黒くごつごつとした大きな手は、今にも繊細なグラスを握り潰しそうである。

相当苛立ってるな、こりゃ。

「二つ目に巡行バス内での毒ガス事件。セクター二、第八区クレーンを走行中のバス内部でどっかのバカがソマンを巻きやがった。運転手は毒の影響で運転を誤り、そのまま付近の飲食店に激突。歩道を歩いていた一般市民を巻き込み、飲食店にいた客も数人巻き添えを食らい死傷者を出した。バスの乗客は漏れなく全員死亡してしまった」

「おいおい……普通に大事件だろ、それ……」

毒ガスはまずい。どう考えてもまずい。

それ一つでも世間を賑わすには十分すぎる事件だろう。

俺の言葉に反応もせず、デビツトは相変わらず難しい顔をしている。

「しかもそれだけではない。乗客の遺体からは毒ガスの発生源になり得るものが何も出てこなかった。乗客の誰かが毒ガスをバラ撒き、乗客全員を道連れにしたものだとか俺は思っていたんだが、何も拳がっつてこない」

「おいおい？ バスはずっと走ってたんだろう？ その何かがなくて、なんで毒ガスが湧いてくんだよ？」

「分からない。ただ、事実そうだ。車内や近辺などを隈無く探させ
たが、未だに見つかっていないのが現状だ。お陰で捜査は難航して
いる」

そりゃまたおかしい事件だな。

おかしいというより奇妙だ。そんなことはありえるんだろうか？
車から飛び降りて逃げたにしても、走行中の車からダイナミック
に降車する人間など絶対人の記憶に残るはずであろう。

一体、どういうトリックを使ったんだ？

「三つ目は殺人事件。セクター三の第二十一区エピオルニスのアパ
ート内でそこに住んでいた青年が射殺された」

おそらく俺が居合わせた事件だろう。少しばかり顔が強ばりそう
になるのをなんとか堪え、平静を装うように芋焼酎を口に含むよう
にしてグラスで顔の一部を隠す。

「まあ、この街じゃありふれた話だな。だが、この事件にも不可解
な点がどうにも多くてな。被害者の住む部屋で殺されたはずの死体
が、どういうわけか屋上に移動していた。しかも部屋から屋上へ行
くまでの道に血痕はなかった。おかしいとは思わないか？ 被害者
は心臓を撃ち抜かれていた。その死体を運ぶ時にどうして血痕が残
らない？ その時点ですでに不可解すぎる。しかも、屋上には被害
者の血で記号らしき物がでかでかと描かれていた」

言って、デビックはカウンターに置かれた紙ナプキンを一枚手に
取ると、それをテーブルに広げ、グラスの表面に結露した水滴を指
につけた。濡れた指先で、デビックはナプキンに何かを書いていく。
「こう、角張ったSのような記号だ」

言いながら描かれた記号は確かにその言葉の通りと思えるものだ
った。紙の端左上部から、右上部に向かって短い黒い線が延び、紙
の対角線に沿うような形で直角に曲がる。対角線をなぞるように右
下へと直線が進み、最後に対角線から右へと直角に曲がる。角張っ
たSのような形というのは的確な表現だろう。

「この記号、見覚えはないか？」

「いや、世代の同じなお前が分からないんだから、俺にも分からないだろう?」

「やはりそうか。新人にまで聞いてみたんだが、やはり見覚えはないらしい」

探偵やって長いが、こんな記号は見たことがないな。

比較的、情報は広く集めてるはずなんだが。

「つうか、これ、Sとするなら反対じゃね?」

「ああ、そういえばそうだな」

Sの書き始めは右上からだが、この記号の書き始めは左上からだ。まあ、ますますわけわからなくなっただけ、だけどな。

「描く時のミスか、それとももともとこういう記号なのか……。何かを伝えるためのメッセージにも思えるのだが、今のところこれといって手がかりが掴めなくてな」

しかし、あの男が地面に描いていたのは、こんな記号だったのか。あの時は動揺していて気付かなかった。

「何かを象徴しているのか、これ自体が一つのメッセージになっているのか、それさえも分からない。犯行の手口も、目的も不明。どこから手をつけていいのか分からない事件ばかりだ」

「一日に三つも厄介な事件が起こるなんて、物騒な世の中になったもんだな」

昔から物騒だということは分かっていたが、こんな大きな事件はそうそう起こるものじゃなかった。一日のうちに必ず誰かしらがトラブルに巻き込まれて死ぬが、そんなのは本当に些細なもので犯人だっけすぐに捕まった。

それがインノルムという場所の日常だ。大がかりな犯罪なんてのはなくて、その場の勢いだとか魔が差したとか口論から発展しての喧嘩による人死が常であるはずだっていうのに。

「最初の発砲の後も屋上から何度か銃声がしたのを付近の住民が聞いている。また、最初の銃声の直後にアパートへ駆け込んでいく男女の二人組を見た、という情報もある。何かしら事件に関わりがあ

るものと見て、今探させているところだ」

「ぶぼっ！」

口元にグラスを傾けたまま、飲もうとした焼酎を吹き出してしまった。

グラスに戻って跳ね返った酒が鼻腔に逆流してくる。驚きに息を呑むと同時に誤って鼻から酒を吸い込んでしまう。普段出るのが常の場所を焼酎が逆流し、喉の奥を通過していく慣れない感触に、今度は噎せ返ってしまう。

そんな俺を、デビツクは冷たい目で見ていた。

「……どうした？」

「ちよつと、酒が変なところに入ってた……」

目元に浮かんだ涙を拭い、まだ喉の奥にある違和感を払拭するために咳をするが全然効果はない。

「なんだ、もう器官が弱ってきたのか？ まだそんな年ではないだろう」

「違いよ。ちよつと詰まらせたただだったの……」

まだそんなに衰えてはいないはずだ。最近、階段の昇降とかは結構膝に来るようになってきたけどな。あの足上げる動作が何気に辛いんだよ。

しかし参ったな。

そうだよ。あの時はその場の勢いに任せてアパートに飛び込んでしまったが、あそこには大勢の野次馬がいた。誰も見ていないわけがない。

俺だとバレたらまずいことになりそうな気がする。別に事情をそのまま話せばいいのかもしれないが、そうするとあの嬢ちゃんが捕まりそうな気もするんだよな。

まあ、見つからないことを祈ろう……。

あの時の俺の行動は些か軽率すぎたな。少しばかり反省してしまふ。この歳にもなって落ち着きがない自分は、本当に成長してないな。

まあ、目の前でわざわざ身を危険に晒そうとする子供がいて、それを見過ごすつても自分としては納得いかないけどな。

世の中は難しい。

「探してるのは東洋人の男性とアーリア人の若い娘だ。男の特徴は無精髭に枯れ草色のコート、年齢に関しては情報がはっきりしていない。東洋人の外見年齢は分かりづらくて困る。アーリア人の方は金髪碧眼で白いトレンチコートにハンチング帽を目深に被っていたとのことだ」

「なんだ？ 随分はつきりしない情報だな」

「ああ、連中、態度ばかりデカいくせに小心者らしい。発砲を聞いて怯えるばかりで周りのことになって全く目が行かなかったらしい」呆れたようにため息を吐き出し頭皮をぼりぼりと掻くデビツクに對し、俺は渴いた笑いを返しながら焼酎を舐めた。

その場にいたからよく分かる。連中の肝っ玉の小ささはこの目で見かて見ていたしな。

「朝も夜も銃声が止まなすぎて気付かないと言う二十四区の連中の方がまだ男らしい」

「あそこの連中は銃と花火の区別がつかねえからな」

「それだけだったらまだいい。連中は人とカボチャの区別も付けられない、と来ている」

流石は一日に市内で起こる事件の六割を常に占有し続ける最果ての二十四区レイヴンだ。筋金入りのどうしようもないバカどもの掃き溜めであるだけのことはある。

俺も依頼で二、三度立ち寄ったこともあるが、あそこは本当に生きた心地がしなかった。鳥の鳴き声と同じ体で銃声がどっかからか聞こえてくるし、ポイ捨てされた空き缶と同じ体で行き倒れがいるし、挨拶と同じ頻度で喧嘩ばかりしているような場所だ。最終的には世間一般でいう喧嘩のレベルで殺し合いをしている。

出来うる限り、あそこには近付きたくないものである。

「まあ、なんだ。お前ももしそれらしい人物を見つけたら連絡をく

れ。人捜しは得意だろ、探偵さん」

「んー……ああ、もし見つけたら、な」

朝起きて、鏡の前に立ったら速攻で見つかるんだけどな、片方はそんなことを話しているうちにマスターが注文していたつまみを持つてくる。

俺は鶏皮揚げの載った黒い陶器の皿を受け取り、デビックはカマンベールフライの載った白い磁器の皿を受け取った。

揚げ物の油っぽさがある香ばしい匂いと揚げられたチーズの独特の香りに胃の底がくすぐられる。

俺は背凭れに引っかけたコートの懷に手を突っ込み、麻の布で包んだ箸を取り出した。

「まだ、自分用のハシを持ち歩いてるのか？」

そう言うデビックの目は冷たい。こいつは箸を上手に扱えないから、そんな食いつらいもので好んで食事をする俺達が理解できず、結構否定的だ。

いいじゃねえかよ、箸。つまみやすいだろ。

しっかりと揚がった鶏皮を一口に放り込んだ俺は、カリカリとした衣と柔らかい鶏皮の食感とこしょうのぴりつとした味わいに舌鼓を打ちつつ、デビックの目の前で器用に箸を動かしてみせる。

「最近和食は結構どの店でもまともなもん取り扱ってくれるようになったけどよ、結構箸は置いてねえんだもんよ。やっぱ和食は箸だろ。スプーンとかフォークとか甘えだよ、甘え」

「フォークの方がどう考えても食べやすいからだろう。ハシなんて食べづらいだけだ」

「分かってねえなあ。この二本の棒があるだけで大抵のもんは食えるんだよ。それと箸のイントネーション、毎度のことながらおかしいから。それだと橋になるから。分かる？ ブリッチ、だよ、ブリッチ。チョップスティックは箸な」

「ブリッジな」

「あ……すみません……」

日頃使ってるヒルベルト語で発音間違えるとかさすがに頂けないな。

ちよつと心が故郷に帰りすぎていた。すつげえ得意気に話してた分情けなさで辛い。

「普段、家で使う分には本人の自由だとは思うが、外食の時でもハシに拘るといふのはどうなんだ？ フォークで妥協できないのか？ 昔は普通にフォークを使っていたらう、お前」

「分かってねえなあ……。この歳になると故郷つてのが懐かしくなるもんなんだよ。箸を使つて、生まれ育った場所を思い出したくなるもんなんだよ。やっぱ、エイジアで生まれ育った俺にはこれが一番なわけ」

しみじみと語る俺に向けられるデビツクの目は冷たい。むしろ理解することを放棄した者の目をしている。

「……お前は、たまに面倒だ」

「うつせえな。倭国の心がお前には分からないだけだ」

「ああ、そうだな。たまに相当高い物をつまらぬものですが、などと言つて渡してくる時など本当に理解できないといつも思っている。本当につまらないものだと思つて、普通に受け取つてしまうだろう」

「あれは謙遜つていう文化なの。謙ることで相手を尊重してんの」

「それで誰が得をするんだ？ いいものなら胸を張つていいものと渡せばいいだろう」

「ま、まあ、そりゃそうだけだよ……」

そう言われてしまうと、なんかこう……なんでなんだろうなあ？ 確かによく分からんな。

「ほら、言葉に詰まる。俺達異国人には理解できない独自の文化の理由を聞くと、文化だとか伝統だとか答えるが、さらに突っ込んで本質や意味、メリットなどを聞くとほとんどの連中が答えられないそれがどんなに非効率的なことだとしても、みんな揃つて同じことをしている。結局倭国人は伝統や文化だのと尤もらしいことを言つて、今までやってきたことを当然のように続けているが、その本質

を理解できているものなんてほとんどいない。ただ惰性で続けているに過ぎない。そこが俺は理解できない」

「まあ、そうだなあ。西洋人には理解できないだろうな、俺達のことって」

別にデビツクはエイジアが嫌いなわけじゃないんだが、よくこういう話になる。こいつは結構愛国心が強いからな。頭硬いな本当にいつもはカニスが切りのいいところでデビツクを止めてくれるんだが、今日はそのカニスがない。今晚は長くなりそうである。

「大体、なんで手書きにこだわる？ 手書きの字なんて癖があつて読みづらいただろう？ 今はワープロがある。それを印刷した方が読みやすいし手軽だろう？」

「いや、ほら、手書きっていう手間をかけることに人の温もりつてものがあつてだなあ……。こう、字の質感とかで伝わるものがあるじゃん……？」

「そんな手間をかけて一体何の意味があるんだ？ それに伝えたいものは全部書けばいいだろう？ なんで文章に書かれていないものを感じ取るようなことをしなければならないんだ？ 言いたいことがあるならはつきり書けばいいだろう？ なんでお前達はそうやってはつきりと言わずに、相手が察するのを待っているんだ？ なんで俺は一日に一回愛していると言ったのに『貴方の言葉には愛がない』なんていう書き置きだけ残されて女房に逃げられたんだ？ なんだで？ 俺はいつも愛してると言っただ。婚前の約束を守って、仕事で帰れない日も日付が変わる前に電話で愛してると告げたぞ？ なんであいつはあの時手書きだったんだ？」

「……ああ、まあ……それはどう考えても……いやあ……うーん、どの辺がいけなかったんだろうな……」

どう考えてもお前が仕事ばかり優先したせいだと思っただけだなあ。

大抵、女性が別れを告げた時に言う理由って本当の理由じゃないじゃん？

離婚の原因を分かっているのは多分、こいつだけなんだろうな。それ以外の奴はみんななんとなく分かっているはずだ。

言いたいことは何でも言うところもいけなかったんだと思います。本人には言えないけどな……。典型的な東洋人なんで、俺。

大して味わっているとは思えないペースでひよいひよいとカマンベールフライを口に運び、ハイボールを流し込んでいくデビツク。随分とペースが早い。まずいな、こうなったデビツクは止められない。カニスじゃなきゃ抑えられない。そしてどういうわけかカニスはいない。

恐ろしい夜になりそうだ……。

「大体だ、そもそもなんで、エイジアンは何かにつけて、すぐすみませんと言うんだ？ こっちが悪いことをしているみたいじゃないか？ もっと普通にしていればいいのに、なんで連中はすぐにへこ頭を下げる？ 連中の頭はそんなに重いのか？ お前は何も入っていないような顔をしているというのに」

「いやあ、それはきつとお前の顔が怖いんじゃないか……」

黒人でガタイが良くてもしかもスキンヘッド。これは東洋人から見たらマジで怖い。あとヒルベルト語覚えるまでは、倭国語が通じないってだけで大分怖かったな、外人は。

話せるようになったらなつたで、言いたいことをびし言ってくる西洋人のストレートさが怖くなつたけど。今となつてはもう慣れた。

「それならそうと云えばいいことだろう。全く、これだからエイジアンは」

「だから倭国人は基本的にそういうこと言わないの。お前の顔が怖くても、貴方の顔は男らしいですね、と言うんだよ」

「今その話を聞いて、あの時喜んだ俺の気持ちになつてみる！」
低く絞った声で凄み、デビツクは残り僅かなハイボールを喉へと流し込んだ。

あー、こりゃダメだ。完全に長くなる。しばらく終わりそうにな

い。

しかし、こつやつて祖国を罵倒されて平然としている俺も大概な
んだろうな。

愛国心？ あるかなもん。

あるのは郷愁だけだ。

国に対しての愛着とかは特にない。

ただ、俺は自分が生まれ育った場所にあつたその生活が恋しいだ
けだ。

漠然と地図から読み取れる形くらいしか分からないものに愛が芽
生えること自体がおかしい。俺達が親しむのは国なんていうバカデ
カいもんじゃなくて、自分が見聞きした範囲のものだけなんだから、
そつちの方がよっぽどマシだと思ふんだがな。

ウィグナーの友人のトラブル

結局デビックから解放されたのは午前二時を過ぎてからであった。さんざん愚痴やお国自慢に付き合わされて、こっちはアルコールが足に回っておぼつかない足取りだというのに、デビックは存外しっかりとした歩調である。

やっぱヒルベルト人は酒に強いのかね。まあ、多分頭の方には大分回ってると思うんだが……。

俺も故郷では強い方だったんだけどな。井の中の蛙であつたわけだ。

デビックはタクシーを呼んで、そそくさと帰っていった。いいね、リッチな奴は。

対して俺はしがない探偵。事務所兼自宅に歩いて帰るしかないのである。ここから事務所は歩いて大体一時間つてところか。

酔いを覚ますにはちょうどいい散歩かもしれないな。

頬を撫でる夜風の冷たさが上気した頬には心地よい。

さて……帰るか。

あまり乗り気にはならないがしょうがない。決心をつけて俺は背の高い建物の間に挟まれ縮こまったバーに背を向け、街並みへと向き直る。

街には未だ喧噪と光が溢れていた。若者が大人が男女問わず入り乱れて闊歩し、車は絶え間なく道路を行き交っている。立ち並ぶ店の窓からは光が漏れ、人々の笑い声が聞こえてくる。

けばけばしいネオンサインが絶えず網膜を焼き、車のクラクシヨンが耳を劈く。人と音と光が織り成す目まぐるしい洪水。あらゆる刺激が怒濤のように五感を揺さぶり、ただ圧倒されるしかない。

継ぎ接ぎだらけのアスファルトの上を風に攫われたゴミが滑り、車が轢いていく。

向かい側の歩道から遠慮なく張り上げられた若者達の笑い声が聞

こえたかと思えば、どこからか男の野太い怒声が聞こえてくる。

その全てを消し去るように車のクラクションが鳴り響き、またどこかで人の声が聞こえる。

決して休むことなく、そもそも休みすら知らないように荒れ狂う濁流。あらゆる刺激が嵐となって渦巻き、全てを呑み込み喰らい尽くす混沌。

それこそがインノルムの夜である。

ここで多くの欲望と野望が芽吹き、花開いていく。そしてまた数え切れないほどの人々が一夜限りの夢を謳歌する。終わりを振り払うように足掻き続ける。

朝になれば終わってしまう夢を少しでも長引かせようと抗い、そして黎明と共に消えていく。

朝になればまた何事もなかったかのように穏やかな喧噪が訪れ、夜の再来と共に人々が欲望を剥き出しにして食らいつく。

何千何万とそのサイクルを繰り返し、まだ尚飽きることなく光と音は拡散し続けていた。

……何度経験しようこの刺激には目眩がする。さっさと帰ろうしよう。

俺はコートのポケットに手をつ込み、ゆっくりと道を歩き始めた。

このバーから事務所までは何度も行き来している。今更意識しなくても帰ることができる。そのせいもあって脳みそは自然と思考を回転させていく。

特に意識するわけでもなく、思考は今日起こった出来事の中で最も印象に残っているものへと触手を伸ばした。

あの一件は一体なんだったのか。

もう一度考えてみるとするか。

俺はあの場所で依頼に従い、青年の身辺調査を行っていた。しかしどういうわけか青年は何者かに殺され、その何者かは撃つても死なないどころか、銃弾が直撃したというのに当たっていないという

どこまでも馬鹿馬鹿しい矛盾だらけのことを起こす化け物だった。

あのマジックのタネはどんなものだろうか？

おそらくあの少女は男を絶対に殺すつもりだった。少女の焦りや必死な形相を見れば間違いないはずだ。あれが演技だというのなら、あの子はレッドカーペットをイブニングドレス着て歩けることだろう。

というわけで二人で協力して、俺を騙したという説はなしだ。まあ、そもそもそんなことする理由もないわけだが。

実はあの服の下に厚い防弾チョッキを着ていた可能性は……ないな。例え防弾チョッキがあつたとしても、衝撃は相当なものだ。俺も経験があるから知っている。直撃すればかなりの衝撃が腹部に来るし、油断すれば意識が飛びそうになる。それを数発も受けたあいつがあんな風に平静を装える可能性は低い。しかも銃弾は確かにあいつの背後へと飛んでいったのだ。そもそもそれ自体がありえないことではあるが、そうなると尚更防弾チョッキというのはなしだ。

他に考えられるトリックはなんだろうか？

身体にもともと銃弾が通れるようなトンネルが開いていたとか？ いやあ、それはあまりにもありえない話だろう。大体あいつは体中撃たれまくってたわけだし。全身穴だらけつてことになっちゃう。そもそもあいつの着てた服にだって穴は空いてなかったんだ。最初の一発を除けばの話ではあるが。

考えたところで、謎が解けるのかさえ疑わしくなってきたな……。トリックを解き明かすなんてのは俺の専門じゃない。警察の領分にまで踏み込めるような名探偵ではないのだ。推理力があるわけでもない。

ただ、人よりちょっと、周りを観ているだけに過ぎない。俺個人では気付けなかったその能力を見出し、道を示してくれたのはあの人だったか。

取り柄も何もないと思つてた自分が知らず知らずのうちに持つていた、人の役に立てるものに気付かせてくれた。

そんな場所に思い至って、俺は立ち止まり、夜空を仰いだ。棚引く雲の隙間から見える僅かな青みを帯びた黒い空に目を凝らすと僅かに星の光を観ることができた。この街じゃ星はあんまり見ることができない。生まれ育った故郷であれば満天の星空が広がっているというのに。

あの空に思いを馳せて空気を吸い込んでも、肺を満たすのは重苦しい空気だけだ。故郷のように澄んだ空気はここにはない。

そうやって日常的に澱みきった空気ばかり吸っているから、心まで汚れきってしまうんだろうな。

故郷に想いを馳せる俺を疎んじるように冷たい風が吹き付けてきた。その冷たさに肩を震わせ、俺は目を細める。

「ん？ あら？」

ふと前方から声が聞こえた。すっかり空に浸っていた心が、街へと急降下する。

「あらあら、自分の顔の造詣の醜さに気付いて、人目に見せないように上を向いているの？ でも残念だけれど、その程度ではおじさんの醜さは消えないわ。本当に残念」

空に向けていた顔を正面に戻すと、見覚えのある顔が目の前にあった。

黒いハンティング帽に金色の長い髪、切れ長の碧眼　忘れもしない。その顔はしっかりと脳裡に焼き付き、剥がれ落ちていない。

目の前で腕を組み、不快そうに俺を睨み付ける少女に俺の顔は自然と苦いものになる。

これだけ距離が近いせいだろうか、薔薇を思わせる香りが鼻腔にくすぐった。恐らく少女の身体から放たれる香りなのだろう。

生ゴミの異臭が漂うこの場所には不釣り合いな匂いだった。

「何？ その顔は？ もともと不快極まりないというのにもっと不快だわ。人の顔を見ていきなりそんな顔をするのは失礼じゃないかしら？」

「お嬢ちゃん、その言葉、そっくりそのままお前に返すわ」

だって、こいつ、さつき俺の顔を貶したよな？ 顔に出すのと、言葉に出すの、どっちの方が悪質だろうか。倭国的には後者の方が悪質である。

「ていうかおじさん、酒臭い」

「……うるせえよ」

「煙草臭い」

「……はいはい」

「加齢臭がする」

「まだ臭ってねえよ！」

「どうせ足の裏も臭いことだろう。ううん、臭い。シュールストレミングといい勝負ね」

「お前、嗅いだこともねえのに、よくもまあ、そう決めつけて……」
「見た目が臭っている。むしろ見た目が臭い」

……ダメだ。こいつと話していると生きる目的を見失いそうだな。なんか自分が生きるに値しない下等な存在に思えてくる。

話題を逸らそうかな、もう。

「大体、なんだってこんな時間にほっつき歩いてんだよ。もうよい子は寝る時間だろ？ お前みたいなのが一人で出歩いてると危険じゃねえのか？」

まあ、日中の出来事を見る限り、何かあっても大丈夫そうではあるがな。それでもやっぱり、心配なものは心配なのである。

「私にもいろいろあるのよ。悪い？」

「悪いに決まってるんだろ、家に帰って、さっさと寝ろ」

「貴方に指図される筋合いはないわ。おじさんこそ、早く家に帰った方がいいんじゃないの？ 若者に財布を奪われないうちに」

にやりと悪戯っぽく笑って、そいつは冷たい上目遣いで俺を見つめてくる。

盗まれるほどの金もねえけどな……。

「はいはい、言われなくてもそうするよ」

ため息をついて、頭の後ろをぼりぼりとかく。俺もこいつにいつ

までも付き合ってるわけにいかない。明日というか今日も朝からいろいろやることもある。

元気溢れる若者とは違うのだ。

「お前も早く帰って寝ろよ」

それだけ言い残し、俺は少女の横を抜けてその場から立ち去ろうとする。

「あ、そういえばそうだ」

「ん？」

少女の脇を抜けてすぐ、呼び止められた俺は立ち止まり、首だけを少女の方に向ける。

また何か嫌味でも言われるのでは、と思ったが、その予想に反して少女の顔は真面目なものだった。鋭い碧眼が、俺をじっと値踏みするように睨んでいた。

「貴方は昼間、どうしてあそこにいたの？」

「は？ そんなこと聞いてどうすんだよ？」

「別になんだっていいでしょう。答えて」

少女はまるで命令でも下すような硬い声で答えをせがんでくる。

深い海を思わせる碧眼は細められ、今にも飛び掛かってきそうな獐犢さがあつた。

……どうしたもんかな。

少しばかり迷う。

本来なら答えるべきではないんだろうが、なんか取り殺してきそうな勢いなんだよな。

……話せるところまで話しておくか。

「あー……まあ、話せるところまでは話してやってもいい。ただ、条件が一つ」

「はあ？ 取引するつもり？」

少女はあからさまに不服そうだ。

あれ、まずったかな。

逆に怒らせてしまったようで、少し焦る。

声が上擦りそうになるのを必死に抑え、努めて平静を装い、俺は落ち着いた体を心がけながら言葉を続ける。

「悪い話じゃねえだろ？　ただ与えられるのは子供の時分だけだ。お前はもうこんな時間まで出歩ける大人なんだから、等価交換するのは当たり前だと思うが？　取引もできないようなおこちゃまなら家に帰って、大人しく寝てることだな」

大仰に手を広げて、俺は引き攣らないようにゆっくりと狡猾そうに笑んでみせる。

多分出来ているはず。

昔、なんかの映画で見た黒幕の立ち振る舞いを必死に思い出し、どうにかこうにかそれを真似てみる。

少女は見るからに不服そうに歯噛みし、ぴくぴくと痙攣している眉は明らかに苛立ちを示している。

それでもしばし間を開けたあと、少女は観念したようにため息を吐き出し、両手を広げてみせた。

「オーケー。いいわ。そうしましょう」

意外にあっさりと少女は話に乗ってきた。少しばかり拍子抜けだ。俺はてつきりここからしばらくは意地の張り合いが続くと思っていた。そのために今後の受け答えをあれやこれやと考えていたというのに……。

全く予想していなかったせいか、俺は動揺し、次に言うべき言葉が出てこない。

何も言ってこない俺に疑問を抱いたのか、少女が横目で俺を見ってくる。

「どうしたの？」

「あ、ああ、な、なら交渉は成立だなっ！」

上擦った声で、しかもどもりながら俺は口早にそう言いきる。

カッコワル！

身振り手振りも不完全で落ち着きなく、俺が倣おうとした黒幕の悠然とした余裕ある振る舞いはどこにもない。これではただの挙動

不審者である。

「それじゃあ、どこか店にでも入るとするか」

話し合いと言ったらやっぱり喫茶店だろうか？ いや、もう閉まってるか。どこかファーストフード店にでも入るべきか……。

対して、少女の目は冷たかった。

「……おじさん、バカでしょ？」

「え？」

「なんでそんな不特定多数の人間がいる場所で話さなきゃならないの？ 誰が聞いているかも分からないでしょ？」

「あ、ああ……それも、そうか……」

言い返しようのない指摘に俺は情けなく頷くばかりである。そんな頼りない俺に、少女は額に指を当て首を振った。

「さっきまでの威勢はどこに行ってしまったの？ 育児休暇でも取ってしまったの？」

「う、うるせえな！」

「まあ、いいわ。貴方が例えクラスのヤンキーに恐喝されている根暗みたいに挙動不審だとしても、情報を持っているのは確かだものね。いいわ、近くに車を停めてるの。そこで話をしましょう」

言って、少女は肩にかかった髪を払うとすたすたと歩き出していく。

俺はその細い背中を見つめ、無性に泣きなくなってきた。

三〇年以上生きてきた俺より、二〇年も生きていないあいつの方が段取りいいってのはなんか切ないよな。

俺って、ダメだな……。

車が停められていたのは、人々の喧噪から遠離れた細い脇道の端に潜むように設置された月極駐車場であつた。

付近にはコインロッカーが設置され、アスファルトの地面には相

変わらずゴミが散乱している。

人通りは皆無に等しく、たまに駐車場に接する道を歩く人間も酩酊しており、俺達に関心を向けることがなさそうである。

少女の車は駐車場の一番隅に置かれていた。その隣にはワゴン車が停車しており、隠れるにはちょうどよかった。

アーリア製の高級車だった。黒みの強い深緑と丸みのあるフォルムは、どこか昆虫の外骨格を思わせた。

車にはあまり興味がないんだがな、俺は。若い頃、周囲の仲間達が車の話で盛り上がってる時も俺だけは蚊帳の外だった。どうにもこういうものにはあまりロマンを感じられない。

それでも、高級車であると分かる程度には、その車も高級だった。名前を思い出せない程度でもある。

そこそこ有名な車、という認識で落ち着かせようか。

俺は助手席に、少女は運転席に座っていた。

車内にもゆとりが多く、俺の乗用車のような窮屈さは一切ない。のんびりと足を伸ばせるし、シートの座り心地も抜群だった。

車のエンジンをかけられると、荒々しい音と共に空調やオーディオ機器が活動を始め、カーナビの画面にも光が灯る。

オーディオのボタン類が放つ光は眩しく、目に痛い。

やがてオーディオは中に入っているであろうCDを読み込み、ドアの下方に設置されたスピーカーから音が流れ始める。

知らない歌だった。ポップでノリのいい音楽だとは思った。叫ぶような声で、男性が力強い歌声を響かせている。

……あれ？

「おい、これ、倭国の歌か？」

「何よ？ 悪いの？」

思わず驚きの声を上げる俺に少女は不満そうに顔を顰める。

「いや、悪かねえけどよ……まさかここで倭国の歌を聴けるとはな……」

しかもアーリア人の車の中で。これは嬉しいサプライズである。

なんか無性に嬉しいね、こういうの。

自国の文化が認められているっていうのか。

日中での会話では倭国嫌いかと思ったが、別にそういうわけではないらしい。一部だけでも認められてるってのはいいもんだな。

「まあ、いいわ。それで、貴方はどうしてあそこにいたのか話して頂けるかしら？」

「えらく性急だな」

「いいでしょう？ 別に貴方と話すことなんて何にもない」

冷たい態度だった。俺に関してはあまり興味がないようだ。それはちよつと寂しいんだけどな。

「もう少しなんかあんだろ？ 自己紹介とか？」

「私はイリス・ユディット。アーリア人。十八歳。貴方は？」

「湯川啓輔……三十七歳」

「はい、おしまい。じゃあ、本題に入りましょう」

え！？ そんだけ！？

一応自己紹介はしたけどさ。普通そつから話題が広がるものじゃねえの？

俺が知ってるのと違う。

「それで？ どうして、あそこにいたの？」

「仕事の一環だよ。あそこに住んでる青年の身辺調査をしていた」

「調査？ 仕事？ 貴方の仕事って何なの？」

「……探偵」

ぼそりと俺は呟くように答える。

あんまりこういうのは明かしたくないんだけどな。

特に理由があるわけじゃねえんだけどさ。

「ふーん、探偵ね。本当に仕事だったんだ」

どうやらイリスは未だに俺をストーカーだと思っていたらしい。

勘弁してほしい話だ。

「調査してたのはあん時殺された若者だ。そいつの恋人が依頼主。最近、様子がおかしく、何かトラブルに巻き込まれているんじゃない

かろうか、と心配だから調べてほしいっていう依頼だった。まあ、実際トラブルに巻き込まれて仏様になってたがな」

「あら？ いいの？ そんなにべらべら喋ってしまっただけ？」

「どうせ、そこまで話させるつもりなんだろう？ 他言はするなよ、本当に」

俺はシートに身体を沈み込ませ、全身から力を抜く。

これじゃあ探偵失格だな。

十年以上続けている探偵人生で、二回目のルール違反だった。

しかも守秘義務を破ってしまった。探偵を名乗るのもおこがましいな。

「青年の様子がおかしかった、って具体的には？」

「んー、そうだなあ。どうにも、恋人と会う機会が減っていたらしい。予定をドタキャンしたりとか」

「それはただの倦怠期なんではなくて？」

「いや、それまでは予定を絶対に守るし、何でも恋人を最優先にしていたらしい」

「熱したものは冷めやすいものでしょう？」

「ただだけドライなんだよ、こいつ。」

まあ、確かにそういうもんなんだろうけどさ。うら若き乙女に言われると、ちょっと寂しいよな。

「まあ、その可能性はあるとして、どうにも柄の悪い連中との付き合いが多くなったらしい。恋人との予定をキャンセルして、柄の悪い連中と一緒に店へ入っていくところを見たっていう情報も上がってる」

「そんなの女がうざったくなくて、男友達と気兼ねない付き合いをしたくなっただけではなくて？」

「お前はさつきからいちいち意見が生々しいな」

夢もへったくれもねえぞ。

「きつとあれよ、女性はなんでもかんでも理想を押しつけてたのね、無意識に。で、男も必死に応えようとした。彼女を最優先にして、

彼女を大切に扱ってきた。でもそれに耐えられなくて、ちよつと男友達に愚痴を言ってみたら、共感されて嬉しくなった。男同士の緩くてアバウトで束縛し合わない関係って楽で楽しい！ とかって思ったのではなくて？」

「……お前、恋とかしたことある？」

「ないわ。一遍も」

即答であった。

恋ってさ、もつとこう、ロマンチックで素敵なものじゃなかったっけ？ そんなどろどろとした恋はやめていただきたい。他人の話でも聞いて辛い。そのリアルすぎて……。

「あと、もうすぐで大金が手に入る、なんていう話を友人にしていたらしい」

「大金？ 一体どうやって？」

「さあな。話の流れを考えると、例のガラの悪い連中と協力して、犯罪に手を染めてボロ儲けつてのが一番妥当な線じゃねえの？」

「バカ言わないで、C M I D システムが導入された今、そんなことしたってすぐに貨幣局が特定するでしょう」

「まあ、そりやそうだな」

俺は苦笑して、肩を竦める。

そんなことは分かりきっている。

Color Money Identity 通称C M I D。

「価値の尺度」「交換の媒介」「価値の保蔵」それらを担う貨幣の種類を色で区別し、さらに固定のI Dを持たせることで個別化させる制度。

例えば個人の貨幣は黄に、組織の貨幣は緑に、公的な貨幣は青に分類され、その他にも用途や目的によって様々な色が決められている。

個人の目的によって会社の貨幣であるグリーンマネーを使うことはできず、逆もまた然りである。これにより汚職や横領などの事件はほぼ根絶やしとなった。

貨幣の色の変更を行うには貨幣局への届け出が必要であり、当初の申請と異なる用途に用いることはできない。

また貨幣にはそれぞれにIDが与えられており、使用履歴、今までの所有者、使用用途、色の変換記録などなどの情報が記録され、これらは貨幣局が完全に管理している。

謂わば貨幣そのものが記録媒体となっているのだ。また貨幣は現所有者を記録されており、決済を行う際には専用のカードを用いて自分が所有者と同一であることを証明しなければならない。貨幣に登録されている所有者を変更するには、貨幣局のみが取り扱う専用の機器を使う必要があるため、データの改竄も容易ではない。

スーパーのレジや自動販売機などにはこの機器が内蔵されており、決済と同時に貨幣所有者と貨幣の色を会社のものに変更するように設定されているわけである。

世間一般では現金を持ち歩く機会が減り、電子マネーをチャージしたスマートカードを持ち歩くのが最もポピュラーだ。このスマートカードが自身のIDを証明するものにもなっている。

自分以外の所有する貨幣を扱うことは出来ず、例えば本来の所有者のスマートカードを持っていたところで決済はできても、同意の下でない限り必ず足が着く。貨幣局は貨幣の使用履歴の全てを管理しているのだ。その情報を頼りに調べていけば、あつという間に捕まってしまうわけである。

そのため、現代では金目当ての犯罪というものがめっきり減った。議員や会社の横領、汚職もなくなり、IDの関係上取引が成立しない麻薬などの密売も消えつつある。

二十年前、制定されるまではプライバシーの侵害だとか、体のいい監視システムだなどと反対意見も多かったが、実際に実施されてからはその成果に誰も文句を言えなくなった。

まあ、そういうわけで犯罪に手を染めて金を稼ぐことは難しくなってきたはずなんだけどな。

「だとすると、どうやって大金を稼ぐ？」

「真面目に働いて、そんなに簡単に大金が入るわけがないわ。大金は大金を持つている者のところしか入ってこない仕組みになっているんだから」

「そりゃ真理だな」

悲しいことだけだな。

「金は傘売りに似ている。望んでもいない者に与えようとし、本当に欲している者には決して与えようとしない」

「それ、誰の言葉なわけ」

「私の言葉よ」

「そりゃ有り難い」

金つてのは残酷だね、本当に。

経済と流通を徹底的に管理するC M I D制度によって秩序が保たれて尚、金だけは多くの者を狂わせ、取り殺している。皮肉ばかりが絶えないもんだな。

「そういえば、あの殺人現場には硬貨が散乱していたな。あれが稼いだ大金の一部だったりするののか？」

なんとなく思い出す。

バケツいっぱいに汲んだ紅い絵の具をブチ撒けたような惨状に散らばっていた硬貨を。鮮血に濡れて真っ赤に染まったあの硬貨がそうだというのだろうか。

いや、普通大金なら紙幣であるはずだ。硬貨で持っていたら嵩張ってしょうがない。

「あら？ 貴方、案外見ているものね」

「観察だけが取り柄のような男なんだな」

「ふふ、きっと学生時代に趣味人間観察とか書いてしまう痛い子だったのね」

くすくすと茶化すように笑い、イリスは髪を掻き上げた。

そんな恥ずかしい過去は一応ないんだがな。

「いいわ、貴方にいいものを見せてあげましょう」

言って、イリスは腰をシートから僅かに浮かすと、トレンチコ―

トのポケットに手を突っ込んで何かを取り出した。

黒革の手袋を嵌めた細く小さな手の上には一枚の硬貨。それは血を塗りたくったように真っ赤なものだった。

あの惨状で見た硬貨と同じ、鮮血色の硬貨。

硬貨には自らの尻尾を噛んで円を成す蛇が彫り込まれ、円環の中心にはリコリスの花が咲いていた。

「……お前、それ……」

おかしい。そんなデザインの硬貨を俺は見たことがない。

色は違えど、硬貨のデザインは共通であるはずだというのに。このデザインは何だ？

「レッドマネーよ」

「レッドマネー……？」

イリスの言葉を俺は繰り返す。
聞き慣れない名前だ。

そんなカラーのマネーがあることを俺は知らない。

以前、ブラックが何らかの種類の貨幣の色になるかもしれないという話も出たが、ブラックマネーという語感や黒という色そのものに付き纏うイメージの悪さから取りやめになったという話を聞いたことがあるが、赤は知らないぞ……。

これは一体、何の貨幣だ？

「レッドマネーは命の貨幣。死の通貨。命を取引するためだけにあ
る血の金」

「死の、通貨……？」

「そう、命を取引するの。C M I Dが制定されてからは入手が難しくなった銃器、爆発物、毒物、そういった死の商品を取引するためだけの通貨。裏社会でのみ出回っている血塗られた金よ。これは貨幣局が発行した正式な貨幣ではない。信用もなければ、価値もないでも、それ故に貨幣局の監視から逃れられる。裏社会においてのみ価値を持つ貨幣なの」

俺は頭が痛くなってきた。

レッドマネー？ 裏社会？ 死の通貨？

おいおい、これはどんな社会派小説のあらすじだ？ どの三流作家が書いた設定を拝借してきたんだ？

長年探偵やってるが、今のところ裏社会をお目にかかったことはない。結構危ない橋を渡っても、だ。

昔はあるかもなあ、とか思ったけど、そんなもんあるわけないだろうが。

「馬鹿馬鹿しい話はよしてくれよ」

「この貨幣によってのみ取引できる商品は魅力的よ？ 頭に風穴が開くどころか頭そのものがぶっ飛ぶ重火器に、目標を月までイカせる爆発物。その他にも薬物や人身まで売買される。誰かが捕まったところで、レッドマネーには使用履歴が記録されていない。決してバレることはないわ」

……確かに理に適っているのかもしれない。

限定された場所でしか信用がなく、そこ以外では価値を持たない貨幣。非合法的取引に扱われる非合法的通貨。そんなものが本当に成立しているなら、それは相当魅力的な話だろう。

「じゃあ、なんであの青年はそんな危険なものを持っていたんだよ？」

「分からない？ レッドマネーがなければ、それらの非合法的商品は購入できない。例えば麻薬中毒者。彼らはレッドマネーがない限り禁断症状に悩まされ続ける。だから、レッドマネーがどうしても欲しいわけ」

「……そういう奴らにレッドマネーっていうのを高値で売り捌くわけか……」

「そういうこと」
なるほどな。

世間一般ではすっかり見なくなった麻薬密売人ってのはそうやって儲けていたわけか。麻薬を売って手に入れたレッドマネーを売り捌いても儲かるし、レッドマネーを誰かに売ってもいいわけだ。

よくできたシステムじゃねえか。

貨幣の貸し借りは貨幣局に届け出するまでもなく、あっちこっちに設置されている金交易所キンエキジョを使えば済む話だ。互いが合意の上であれば、簡単に所有者を変更できる。

「レッドマネーに明確な価値はない。レッドマネー一枚でいくら分の価値があるというわけではない。そのため価値は枚数で設定されている。だからこそいくらでも自分の好きなように価値を決めて売り捌けるし、一般的に高額で取引されるわ。例えば未調教で二十歳未満の女性は外見にもよるけど、レッドマネー十枚前後で取引されるわ」

人身を通貨十枚で取引か。要するにそれだけの価値がレッドマネーにはあるわけだ。

あの青年の部屋には何枚の硬貨があつた？

十枚二十枚という程度の数ではなかったはず。

売り捌けばいくらになる？

相当な大金になることは確実だ。

なるほど、そういうことかよ。

イリスはレッドマネーをトレンチコートのポケットに戻し、ゆつたりとシートに凭れかかった。

「殺された青年が、一体どういう方法でレッドマネーを入手したのかは分からない。でも、恐らくはそれ故に殺されたのだと思う。きっとあの男の目的はレッドマネーよ」

あの男つてのは浅黒い肌をした口キとかつていう奴のことだろう。

「そうだよ、大体あの口キとかつていう男は何者だ？ レッドマネーを集めて何をするつもりなんだ？ そもそもなんで撃たれても死なない？」

「さあ、詳しいことは私にも分からないわ。私も彼がこの街で何をやらかすつもりなのかは知らない。まあ、恐らく好ましくないことをしようとしているのは確かだと思うわ」

どうやら本当に分からないらしい。

お手上げといった様子でイリスは肩を竦めた。

「それに貴方がそれを知ったところで、どうするの？ 貴方には関係のない話でしょう」

「いや、関係はねえのは確かだが……」

そうは言っても、あんなもんを見ちまったら気になってしょうがないだろう。

これは一種の好奇心によるものだ。あんなものを見せられて、気にならない方がおかしい。直接関わるのは避けたいが、知ろうとするくらいはいいだろう。

「大体、嬢ちゃんはいつらとどういう関係なんだよ？ 昔のクラスメイトか？ 家が近所だったか？」

「そんな和気藹々としたものに見えたなら、おじさんは友人関係を間違えているわ。今すぐ死ぬべきよ」

これは手酷い反撃だった。一応クリーンな人間関係だと思うんだがなあ。

悪いこともあんまりしなかったと思うし。一度だけあるかな、俺大学退学処分受けたしな。

「まあ、特に何もないわよ。ただ、私の仕事がそれなだけ」

…… 本当になんでもないよう口調でイリスは言う。ただ顔は窓の外に向けられて、決して俺を見ようとはしない。

人間、嘘をついている時は、真面目な顔で見つめてくるか、顔を逸らしているものだ。

「仕事って、どういう仕事だよ？」

「……なんで貴方に追求されなきゃいけないの？」

「まあ、そりゃそうか……」

無理に追求することはできないよな。

さて、嘘はどの部分だろうか？

そもそも仕事ではないのか、仕事ではあるが本当は私情を挟んでいるのか、そのどっちか、かな。

本人が避ける以上は、あまり突っ込んでいくわけにはいかねえか

……。

「銃で撃たれても死なない理由は分かってんのかよ？」

「死なないんだから当たっていいだけでしょう」

「……そりゃそうだな」

真面目に答えるつもりはないらしい。

俺は腹の上で指を組み合わせ、低い天井を見上げた。

なんだか煙草が吸いたくなってきたな。

車内に煙草の臭いはない。きっとイリスが吸わないせいであろう。そこで煙草を吸うのは流石に気が引けた。

しばし間が開く。

本来なら居たたまれない沈黙になるはずだというのに、車内にはずつとやたらハイテンションなサウンドと歌声が響き渡っている。轟いているという方が妥当なくらいだ。

沈黙になりきれない無言が余計居たたまれなかった。俺はしばし話題を探すように周囲を見回したが、そんなものは全くなかった。それでも何かを話さないと居心地が悪く、俺は大きく息を吸って言葉を紡いだ。

「お前にどんな事情があるのかは知らない。お前が嫌だっていうんなら、深く関わったりもしない。ただな、あんまり危険な真似はするな。どんな事情があったとしても、自分の命は大切にしろ。無闇に危険なことへ首を突っ込むな」

「うるさいわね……あんたには関係ないことよ」

晴れて貴方からあんたへクラスチェンジした。恐らく降格だろう。まあ、お節介だとは分かってるけどよ。

やっぱりこれくらいの子供が危険なことに関わっているっていうのは見過ごせないよな。

まだまだ若いっつうのに、無茶じゃがって。いや、若いから無茶すんのかね。

そうやって無茶やって大人になっていくもんだとは思うが、過ぎた無茶は取り返しのつかないことになりかねない。そうなってから

じゃ遅いんだよ。

「まあ、そりゃそうなんだがな。無理と無茶はしないようにしとけよ」

「……おじさん、うざい」

その言葉は結構傷付く。

なんつうか自分の歳を実感する。

こういう風にちよっかいかけちまつのも年取った証拠なのかね。そう思うと、どうにも感慨深いものがあるな。

悪い意味で、ではあるけどさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6531z/>

Beyond Beable

2012年1月14日19時50分発行